

身延町和田 お宮横遺跡

県営中山間地域総合整備事業（身延地区）和田ほ場整備に伴う発掘調査報告書

2007.3

身延町教育委員会

山梨県農政部峡南農務事務所

序

県営中山間地域総合整備事業（身延地区）和田は場整備に伴うお宮横遺跡の発掘調査は、2006年1月から3月にかけて実施致しました。本書はその発掘調査報告書であります。

お宮横遺跡は身延町和田に所在し、富士川に張り出す台地上に位置しております。周辺には古くから知られている縄文時代の大久保遺跡や桜井遺跡、寺平遺跡などがあり、町の史跡となっています。また南部氏館跡、身延山久遠寺、下山城下町、国指定史跡の中山金山など著名な遺跡が数多く所在し、歴史性豊かな地域であります。

今回の調査は、約2500m²を対象に行い、縄文時代前期や中期の住居跡、土坑などを検出するなど多くの成果が得られました。身延町で発掘調査された縄文時代の遺跡では平須地区の平須遺跡がありますが、住居跡が発見されたのははじめてです。お宮横遺跡の縄文時代前期にさかのぼる住居跡はおよそ今から6800年前とされ、古くからこの地に人間が暮らしていたことが判明しました。5300年前となる中期の住居跡から出土した土器も、当該期の研究に貴重な資料を提供すると同時に、その造形もすばらしいものと高く評価されるものであります。石器も、打製石斧、石匙、磨石など植物質食料と関わりの強い道具と指摘されるもので、この地での生業を考える上でも貴重な資料であります。住居跡の他の土坑は陷阱と推定され、狩猟とのかかわりを彷彿させられます。こうした遺跡のありかたから集落本体であるよりも生業の出先場であるようにとらえられています。さらにこの身延町内においても縄文時代の集落跡がみつかることを期待することができます。この発掘調査によってその成果は本町の歴史解明に貴重な資料とすることができます。

本報告書が多くの方々の地域研究、学習資料としてご利用いただければ、幸甚であります。

最後となりましたが、発掘調査にあたってご協力いただいた地権者をはじめ関係各位、関係機関、並びに発掘調査や整理作業に携わった多くの方々に、心より御礼を申し上げます。

2007年3月

身延町教育委員会

教育長 笠井義仁

例　　言

1. 本書は平成17年（2005）年度に行った山梨県南巨摩郡身延町和田に所在するお宮横遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県営中山間地域総合整備事業（身延地区）和田は場整備に伴うものであり、事業主体は身延町である。
3. 発掘調査及び出土品の整理は、身延町教育委員会が実施し、文化振興課（平成18年度より生涯学習課）文化財主事今福利恵が担当した。
4. 本報告書の編集及び執筆は、今福が担当した。遺跡地内の火山灰分析については財団法人帝京大学山梨文化財研究所に委託し、同所の河西学氏の報告を掲載した。土器及び石器の一部の実測図を財団法人帝京大学山梨文化財研究所に委託した。遺跡の全体図及び個別遺構図は当教育委員会の測量による。測量基準点については株式会社リナンに委託した。発掘調査終了後に調査区の一部の畠地復旧を有限会社小笠原工業に委託した。
5. 遺跡における遺構の写真、また土器、石器等の写真是今福による。なお、土器の展開写真については有限会社松風ツールアートに委託した。
6. 本報告書に関わる記録図面、写真、出土遺物等は身延町教育委員会にて保管してある。
7. 発掘調査や整理作業にあたっては以下の諸氏、諸機関のご指導、ご教示を賜った。記して感謝を表す。（五十音順、敬称略）
網倉邦夫、小野正文、大内千年、河西学、柳原功一、黒尾和久、小林謙一、佐野隆、末木健、野崎進、野代幸和、保坂和博、山本孝司、山梨県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、北杜市教育委員会、笛吹市教育委員会、峡南広域シルバー人材センター
8. 調査・整理作業参加者（五十音順、敬称略）
近藤登　杉山昭三　田中恵子　手塚武文　中根實　名取みき子　藤田光弘　望月茂子　望月宗一　望月千鶴
9. 発掘調査協力者（五十音順、敬称略）
浅原将八　雨宮直美　雨宮富子　雨宮貞良　市川悟樓　市川新一　市川正文　市川佑武　市川孟　市川嘉雄　小笠原昭明　小笠原忠男　片田健彦　小泉健太　熊谷幸洋　牛腸正江　佐野勇夫　佐野諱司　佐野卓三　佐野政武　杉山トミ子　滝川政司　千須和田鶴子　中山茂樹　野矢春代　長谷川忠文　平田廣子　松永春男　望月勝博　望月照市　望月栄喜　望月省吾　依田勉　若林佳奈

凡　　例

1. 遺構・遺物図版の縮尺は以下のとおりである。
遺構　住居跡1/60（原図1/20, 1/40）、住居内施設の微細図1/30（原図1/10）、土坑1/40（原図1/20, 1/40）
遺物　土器実測図1/4、土器拓影図1/3、石匙・打製石斧・磨石1/3、（いずれも原図1/1）石鏃・小型石器1/1（原図2/1）
2. 調査区は国土座標軸によって設定しており、全体図中にグリッド名と別に付した数値は座標線の数値である。よって、南北のグリッド線及び北印は真北を示す。
3. 遺構挿図中の●は土器、○は石器類を示し、これに付される番号は遺物図版の遺物番号に対応する。土層断面図中の数字は層位を示す。
4. 遺構断面図中のレベルポイントの数字は、標高（m）を示す。
5. 遺物図版中に土器の断面にアミがかかっているものは纖維を含むことを表している。
6. 繩文土器の編年は、『山梨県史資料編2』の「縄文時代の編年」にしたがった。

目 次

例言・凡例

第Ⅰ章 調査の概要

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査経過	1
第3節	発掘調査の方法	3

第Ⅱ章 遺跡の環境と概要

第1節	地理的環境	7
第2節	周辺の遺跡	7
第3節	遺跡の概要	8

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節	竪穴住居跡	10
第2節	土坑	12
	遺構遺物挿図	15
	土器観察表	31
	石器観察表	32

第Ⅳ章 考察

第1節	お宮横遺跡の性格について	33
第2節	土器文様の特徴	33
第3節	1号住居跡の土器出土状況	34
附編	身延町お宮横遺跡のテフラ	36

写真図版

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

身延町和田字大名にあるお宮横遺跡は平成8年刊行の身延町誌資料編によってその存在が周知されている。町誌資料編によると和田金山神社東側から縄文時代及び平安時代と近世の遺跡で、土器、石器が採取できるとされている。山梨県が計画した県営中山間地域総合整備事業（身延地区）に伴い身延町教育委員会でお宮横遺跡の内容及び範囲の確認のための試掘調査を実施した。地表踏査では遺物散布が確認できず、遺跡の正確な範囲と内容が明確でなかった。このため本調査に先立ち遺跡の内容や範囲を確定する必要があり、試掘確認調査を実施することとなった。試掘調査は平成17年9月19日から26日まで実施した。試掘坑は、64箇所を重機及び人力により地山層まで掘削し、精査した（第1図）。調査対象地は民有地で畑地となっており当時も農作物が栽培されていたため、これらをさけて休耕農地を中心に調査を実施することとした。また必要に応じて人力によって試掘坑の掘り下げを行った。このため、調査対象地へ均等に試掘坑を設置できず、偏りが生じていることも否めないが、地表調査ともあわせて遺跡の状況を勘案した。

層序は、地表下約20~40cmまで暗褐色の耕作土（1層）で、以下は黄褐色を呈する地山層（2層）となる。耕作土下には1層と2層が斑状となる暗黄褐色土層が多く試掘坑に見られ、また2層直上に黒褐色土層が堆積しているところが部分的に見られた。

調査の結果、64箇所の試掘坑の内、45号試掘坑において、縄文時代中期の竪穴住居跡と思われる遺構を1箇所検出した。確認した段階で一部掘り下げたところ縄文時代中期土器片（新道式土器）が出土した。さらにこの試掘坑の周辺に試掘坑を多く設定し、遺跡の広がりの確認を試みた。約20m離れた55号試掘坑で竪穴住居状の落ち込みを検出し、一部掘り下げてみたが遺物の出土はなかった。また他の試掘坑からは何ら遺構、遺物が出土しなかった。このため遺跡の広がりはせまいか遺構もひじょうに薄いものと判断した。また調査対象地内の全試掘坑の内17箇所で溝あるいは土坑を検出したが、いずれも遺物の出土ではなく、覆土もしまりが弱いため近世以降のものあるいは木の根跡と思われるものであった。なお当初予想された金山神社東側一帯においては何ら遺構、遺物は検出されなかった。この結果を受けて縄文時代の竪穴住居跡を検出した45号試掘坑を中心とし55号試掘坑を含めたおよそ50m×50mの範囲において埋蔵文化財の保護措置の必要があるものと判断し、協議の結果本調査を実施することとした。

第2節 調査経過

- 平成17年4月12日 文化振興課と産業課で埋蔵文化財の取扱について協議
平成17年4月15日 県峡南地域振興局農務部と埋蔵文化財の取扱について協議
平成17年5月2日 県峡南地域振興局より県教育委員会へお宮横遺跡の発掘通知99条を提出
平成17年8月4日 文化振興課で地権者に試掘調査の説明と協力を依頼
平成17年9月19日 試掘調査開始
平成17年9月26日 発掘通知99条を県教育委員会へ提出
平成17年9月26日 試掘調査終了
平成17年9月29日 お宮横遺跡の遺物発見通知を南部警察署へ提出
平成17年10月12日 試掘調査の終了報告を県教育委員会へ提出
平成17年10月26日 県教育委員会より出土品の文化財認定
平成17年11月1日 お宮横遺跡の本調査について県峡南地域振興局と協議
平成17年11月29日 お宮横遺跡の本調査について地権者へ承諾を依頼
平成18年1月28日 発掘調査開始



第1図 試掘坑設定位置図

平成18年3月1日	お宮横遺跡発掘通知を県教育委員会へ提出
平成18年3月4日	遺跡現地説明会を実施
平成18年3月28日	遺物発見通知を南部警察署へ提出
平成18年3月30日	お宮横遺跡発掘調査終了
平成18年3月30日	発掘調査の終了報告を県教育委員会へ提出
平成18年3月31日	発掘調査実績報告書を県岐南地域振興局へ提出
平成18年4月17日	県教育委員会より出土品の文化財認定
平成18年7月4日	本格的整理作業開始
平成18年11月20日	出土文化財譲与を県教育委員会へ申請
平成18年12月4日	県教育委員会より出土文化財譲与
平成18年12月28日	本格的整理作業終了

第3節 発掘調査の方法

本調査は試掘調査の結果から、遺構が発見された箇所を中心に50m四方で調査区域を設定した（第2,3図）。調査区域設定後、立木を伐採し、重機によって遺構確認面まで表土を除去した。これに引き続いて、人力によって遺構確認面の精査を行い、遺構の検出に努めた。その後、各遺構の精査を行った。調査終了後、調査区域の一部の埋め戻しを行った。これは民有地であったため調査後も工事着工まで引き続き耕作をしたいと申し出があったため、畠地として復旧した。

調査区内のグリッドの設定は、国土座標にあわせ南北をY軸、東西をX軸として5mメッシュを設定した（第4図）。よって、南北軸は真北を示す。グリッド名称は、Y軸にあわせ、調査区の南西側を起点に5m間隔で、西から東に向かってA、B、C～Mまでのアルファベットを、またX軸にあわせて、南から北へ5m間隔で1、2、3～12までの算用数字を付し、グリッドの名称はこれをあわせて、南西起点から東へA-1、B-1、C-1……、北へA-1、A-2、A-3……となるようにした。国土座標は、東西軸の9と10列の間が、X=-72050.00となり、南北軸のCとD列の間がY=-4800.00となる。

遺物の記録は、原則として全点ドット方式で取り上げることとした。グリッド遺物についてはグリッド名を付してからの通し番号とした。遺構内の遺物は簡易遣り方実測及び平板測量、レベル測量により記録した。遺構については、住居跡は連番としたが、その他はグリッド名称を付してから遺構名、番号とした。「A-1土坑2」であれば、「A-1」グリッドで調査された「土坑」の「2」番目という意味になる。遺構図及び遺物微細図は平板測量、簡易遣り方測量によって記録した。

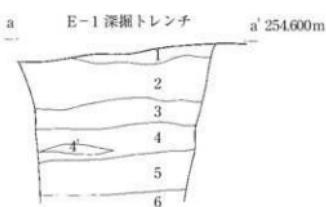
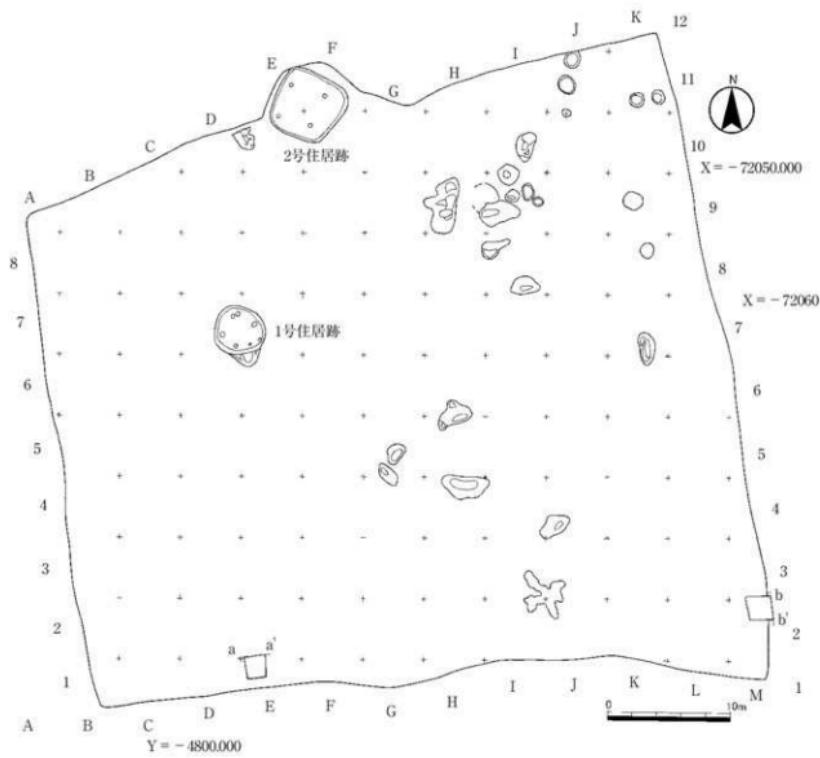
試掘時より遺構面までの表土はおよそ30cm前後と比較的浅いことがわかつっていた。基本層序は、調査区東側のM-2・3グリッドで観察した。1層（表土）として黒褐色土が40cmほど覆い、以下この土層に下の黄褐色土が混入した2層が約20cmあり、そして遺構が掘り込まれる3層の暗黄褐色土となる。3層はおよそ30cm前後の厚さで堆積しており、わずかであるが径10mm程度の小礫を含む。4層は40cm程度の堆積で、3層よりも明るい色調の淡黄褐色土となり、やはり径10mm程度の小礫を含んでいる。以下は、砂礫層となり、10mmから拳大の丸い礫層となる。現地表下140cmほどでこの礫層となる。ここより東側のE-1グリッドでは、やや異なり、下層になるにしたがい砂の含有が多くみられるようになる。ほぼ同じ深さで砂礫層に達するが、黄褐色土中に砂層が挟まるようくみられることから、富士川の影響があったものと推定できる。



第2図 調査区と周辺の地形



第3図 調査区位置図



五一深掘トレンチ
 1層 黒青褐色土 黑褐色土ブロック含む
 2層 棕褐色土
 3層 黑褐色土
 4層 黑褐色土 やや骨粉が少る
 4'層 砂質 1~2mm
 5層 深褐色土上 やや明るい 細粒多く混入 ブルト質
 6層 砂質土 砂質に砂利混じり 内陸 10~20mm 多く混入

M-2・3深掘トレンチ
 1層 黒土 黑褐色土
 2層 黑褐色土上 黑褐色土ノック 1~10mm 多量に含む 1層と2層の混合層
 3層 深褐色土上 深褐色土 10mm 岩土含む
 4層 淡褐色土 黑褐色土 10mm 岩土含む
 5層 砂質土 10mm~中大岩塊多量に含む

第4図 調査区全体図と基本層序

第Ⅱ章 遺跡の環境と概要

第1節 地理的環境

身延町は、富士川を軸として東西に山が連なった急峻な地形となっている。西側から早川が東流して富士川に注ぎ、栗倉山704m、身延山1148m、鷹取山1036m、七面山1982mが連なっている。東側は入ヶ岳、五宗山1634m、三石山1169m、大島峰931mが南北に並ぶ。これら山地から富士川にむかって大小の河川が流れ込み、深い谷を刻んでいる。

遺跡は、JR身延駅南側の富士川左岸に張り出した通称「わだっぱら」と呼ばれる台地上にある（第2,5図）。遺跡の標高は255mを測る。台地上には、南流する富士川が、北側にぶつかって大きく西側へ巻き、台地南側で再び南流する。台地上はやや西側に傾斜しているがほぼ平坦で、富士川との比高差は100mとなる。台地東側は小さな峯（296m）となっているが、峰の東側はすぐ田の沢という南流する沢が深く入り込み、背後の山とは連続してはいない。発掘した場所は、この台地上でも比較的高い位置にある。台地上には、東側の小さな峰より発する小さな沢が見られるが、水量はひょろに少ない。また台地の西側には西村と呼ばれる15m程低くなった小さな平坦地がみられ、富士川による河岸段丘地形となっている。

遺跡のある台地上は黒ボク土が発達し、およそその層序は前に述べたが、現地表の黒ボク土が40cmほどあり、その下が黄褐色土、地表下約140cmで砂礫層となる。基本層序は、調査区東側のM-2・3グリッドで観察したが、ここより東側では下層に砂の含有が多くみられ、富士川の影響がみてとれる。お宮横遺跡の調査区東側にて土層における火山灰分析を行った。方法は、地表下約20cmの地層から5cmおきに土壤を採取し、140cm下の層直上までの12箇所の土壤を試料として分析した。富士川による段丘疊層形成後に洪水堆積物が約50cmほどみられ、地表下約90cmで陸化していることがわかる。また地表下約80cmの黄褐色土中に始良TnテフラATが確認された。これは鹿児島湾の始良火山による降灰でその年代は26,000年から29,000年前とされている。この台地上が富士川川岸であったのは少なくともこのAT降灰以前で3万年をさかのばるものと思われる。これより上層から表土近くにかけては13,000年から16,000年前頃の立川ローム上部ガラス質テフラUG、さらに遺跡で見つかった縄文中期よりもあたらしい縄文時代晩期初頭のカワゴ平軽石Kgに由来するものと思われる火山灰が層位的には拡散しながらわずかであるが検出されている。

層序から、もともと和田の台地上は、富士川の河川敷かその影響の大きいところで砂礫が堆積する状況であり、そこから砂礫ではなく砂などの洪水堆積がはじましていく。富士川離水後は、風成堆積によって土壤が形成されるようになるが、時折火山灰がごくわずかに入り込むといった状況がみてとれる。台地上はこの風成堆積により現在の黒ボク土壤が形成され、縄文時代の生活があって、現在に至っているものと考えられる。

火山灰分析の結果については第IV章附編「身延町お宮横遺跡のテフラ」に詳しいので参考にしてほしい。

第2節 周辺の遺跡

身延町内の和田を中心としたあたりでの縄文時代の遺跡は従来よりいくつか知られている（第5図）。いずれも発掘調査が行われておらず、耕作中等の偶然の機会による遺物の発見であるため、明らかでないことが多い。立地は、富士川から上がった山地の平坦部に遺跡がみられ、富士川右岸域に多く知られている。お宮横遺跡（1）は左岸域となるが、この他には桜井遺跡などがある。縄文時代以前では、本町内において遺跡は発見されていないが、南部町万沢で約2万年前の旧石器時代の天神堂遺跡が発掘調査されている。本町においても発見が期待されるところである。

桜井遺跡（2）は、富士川左岸の台地上にあり、縄文時代中期の土器、石器が出土するとされている。1966年には町指定の史跡になっている。1977年の分布調査では縄文時代前期、中期の遺跡とされ、また1989年の分布調査では縄文時代前期の諸磯c式土器が確認されている。袋遺跡（3）は、富士川左岸より3.5km程西側の山中へ

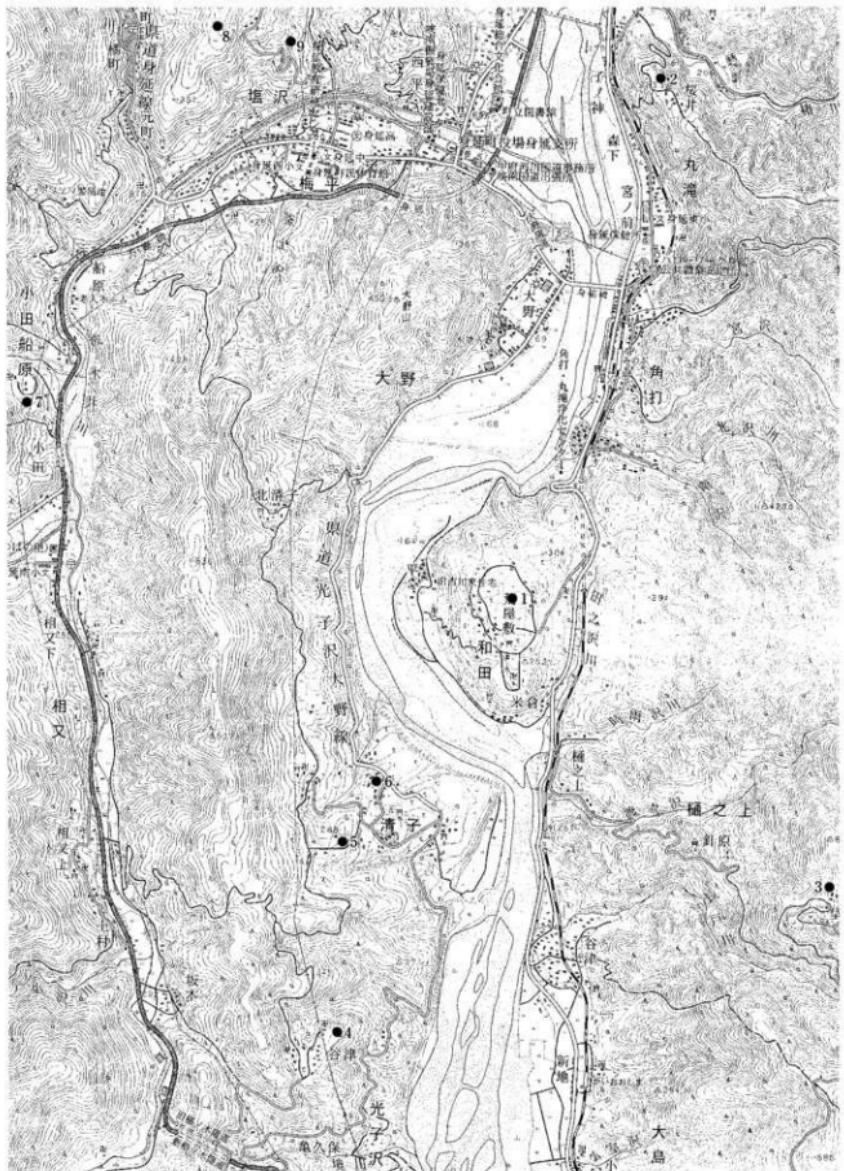
入ったところにある標高540mの樋之上の塁集落付近で打製石斧が採取されているが、詳細は明かでない。

一方、富士川右岸域には比較的多くの遺跡が知られている。大久保遺跡（4）は、標高350mの富士川右岸段丘上に存在している。唯勝寺東側の小高い丘陵上に位置し、現状は煙地となっている。縄文時代中期の土器の出土が知られている。発掘調査は実施されていないが、五領ヶ台式土器、勝板式土器、加曾利E式土器、また打製石斧、石錘、石匙、石鎌などが報告されている。時期的には中期全般にわたるもので継続的な集落が営まれていたものと思われる。1966年には町指定の史跡となっている。丸山遺跡（5）は、清子地区西側の標高280m程のやや東側に傾斜した台地上に知られており、土器、打製石斧、石鎌の出土が報告されている。発掘調査は実施されておらず、詳細は明かでない。1966年には町指定の史跡となっている。横溝遺跡（6）は、清子地区的清子分校跡付近にある。縄文時代の打製石斧が知られているが、詳細は明かでない。上小田遺跡（7）は、平成16年に小田船原の上小田で、沢の切り通しから縄文土器を発見したと市川正人氏から連絡があり、現地を確認したこと縄文時代の遺跡と確認できたものである。発見場所は、沢の切り通しであるが、その上の平坦地で水田となっているあたりに遺跡は広がっているものと思われる。地形は相又川左岸の山中腹の南東側に傾斜したところで標高は280m付近である。出土土器は縄文時代中期後半の曾利Ⅱ～Ⅲ式土器である。寺平遺跡（8）は、身延山久遠寺東側の山頂から南西側への尾根上に土器の散布が見られる。中期後半の加曾利E式土器のほか、打製石斧、石匙、石錘、石鎌が報告されている。1969年に町指定の史跡となっている。西塩遺跡（9）は、寺平遺跡の東側の斜面に位置し、縄文土器が採取されている以外は明かでない。

縄文時代の遺跡は全町的に見ると平須の平須遺跡、古長谷の古長谷遺跡、古閑の三堂平遺跡、常葉五条遺跡、下部上之平遺跡等が知られている。また、古代から中世にかけては、南部氏館跡、下山城跡、穴山氏館跡、常葉氏館跡など甲斐源氏ゆかりの遺跡や身延山御草庵跡や久遠寺を含む身延山周辺の寺院跡など日蓮宗に関係する遺跡が多く残されている。身延町内における発掘調査は、昭和42年、農道改良工事に伴って平須地区の平須遺跡が調査されている。さらに平安時代以降の遺跡では、南部氏館跡（身延町教育委員会1984）、元本国寺遺跡（身延町元本国寺跡発掘調査団1993）、梅平本田遺跡（山梨県教育委員会1997）、がかつて発掘調査されている。湯之奥の中山金山遺跡は戦国期から江戸期前半まで操業された鉱山遺跡で、平成元年より学術調査が行われ（湯之奥金山遺跡学術調査団1991）、平成9年に国指定史跡となっている。

第3節 遺跡の概要

発掘調査では、いずれも縄文時代の生活痕跡がみつかり、縄文時代前期（約6800年前）の竪穴住居跡1軒、縄文時代中期（約5300年前）の竪穴住居跡1軒と土坑23基・集石土坑1基を調査した（第4図）。縄文時代前期の竪穴住居跡は、5.4m程の隅丸方形で、四本の柱穴があって、床面中央やや西側に地床炉がある。出土品は、無文土器や織維土器のほか、打製石斧、石鎌等であるが、出土量は少ない。なお、他に同時期の遺構・遺物はみられなかった。縄文時代中期の竪穴住居跡は、直径4m程の不整円形で床面まで深さ30cm程で、住居中央部や北寄りに土器を埋め込んだ炉がみられた。炉には土器が二個体埋められており、時間差があるものと思われる。柱穴は7本で、建て直しされている。炉の土器と覆土中の土器片が接合し、住居は短期間で廃屋になったと思われる。時期的にはいずれも縄文時代中期中葉に位置付けられる。出土遺物は、土器の他、打製石斧や石匙、磨石等がみられる。土坑は、およそ長さ1.5m、幅1mほどの長楕円形で深さも80cm程で底面は更に狭くなっている穴で、こうしたものが多くみつかった。墓や貯蔵穴とは考えにくく、イノシシ・シカ等小動物の陥穴と推定できる。土坑からの遺物はほとんどみられなかったが、わずかに縄文時代中期の土器片が出土した。時期的には竪穴住居跡と同じかやや古い中期初頭の五領ヶ台式土器、猪俣式土器に位置付けられる。集石土坑は直径1m程の穴に拳大の石をたくさん集めたもので、いずれも石が赤く熱変している。遺跡の性格については、住居跡がわずかにしか見つかっていないことや陥穴様の土坑がいくつかあることから、縄文時代のムラとするよりは、狩猟や植物採集場として利用されたところであって、ムラ本体はまた別の箇所に存在しているものと推定される。



第5図 お宮横遺跡と周辺の遺跡

第Ⅲ章 遺構と遺物

発見された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 2軒、土坑23基、集石土坑1基である。遺物は縄文時代中期中葉を中心としており、土器や石器類が出土している。前期初頭の遺構・遺物は竪穴住居跡のみで他にはみられなかった。土坑のうち9基は、長楕円形で深く、陥穴の機能を推定できるものである。なお、縄文土器の編年には『山梨県史資料編2』では、中期は初頭を五領ヶ台式、中葉を勝坂式、後葉を曾利式と細別し、さらに中葉の勝坂式を古い順に猪沢式1、2、3段階、新道式1、2段階、藤内式1～4段階、井戸尻式1～3段階と細分しており、この名称及び特徴にしたがって記述する。

第1節 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第6～10図）

【位置】 D・E - 7 グリッドに位置する。

【形状・規模】 試掘調査時に確認できたもので、住居プラン中の東側に南北方向で試掘による搅乱が入ってしまっている。覆土の土層図にあらわれており、確認面から約20cmほど掘り込まれているが、床面には達していない。形状は不整円形で、南側には舌状の張り出し部がみられる。住居掘り込み部分で、南北4.0m、東西4.2m、張り出し部分を含めると南北で5.1mを測る。張り出し部分は、舌状となり、さらに両側にやや高まってテラス状となる部分がある。張り出し部の幅は1.1m、テラス状部分まで含めると2.5m、長さは住居壁部から先端まで1.1mとなる。底面は平坦だが住居内部に向かってやや傾斜している。テラス状部分も住居内部に向かい傾斜がみられる。

【覆土】 レンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。最終埋没土の1層は暗褐色土でやや暗く、2層からやや明るい暗褐色土で、床面上には4層の暗黄褐色土となる。住居南側には張り出した部分があり、ここも2層下の3層は暗茶褐色土、その下の5層は暗黄褐色粘質土となり、しだいに明るい色調となってくる。

【壁・周溝】 床面から傾斜して立ち上がっている。周溝はみられない。確認面から床面までの深さは35cm程となる。

【柱穴】 7本検出された。北側では2本が隣接しており立て替えの可能性がある。東西にはそれぞれ1本ずつみられる。南側には3本がほぼ東西方向に直線上に並ぶように配置されているが、いずれも浅いものである。住居南側の張り出し部分に関係するものとも思われ、柱穴の深さに差が見られる。西側のピット1は深さ55cm、北側のピット2は深さ75cm、ピット7は深さ57cm、東側のピット3は深さ52cm、南側は東からピット4が深さ28cm、ピット5が深さ28cm、ピット6が深さ22cmを測る。この南側のピットとの深さの差はおよそ30cmほどとなり、その在り方に差がある。

【炉】 土器を埋設した炉が住居跡ほぼ中央付近より検出された。土器は2個体が埋設され時間差があるものと思われる。ひとつは、土器の口縁部及び底部を欠き胴部約1/3を埋設したものである。摩耗が全体にわたってみられ、住居内より出土した土器片のいずれとも接合しなかったため古いと思われる。もうひとつは土器の口縁部を一部残して欠き、また底部を欠いており、胴部は全周する。口縁部は炉周辺床面上に散在する土器片と接合し、また覆土中の土器片とも接合し、最終的には全周分を復元することができた。掘り方は不整形で、掘った底面に土器を設置している。設置した土器を埋める覆土中の土器片とも接合していることから、土器設置時に口縁部を欠いていて、また使用中にも欠損した部分があるものと思われる。焼土は埋設された土器の外部周辺にわずかしかみられず、層としては形成されていない。

【その他の施設】 住居南側に舌状の張り出し部がみられ、住居入り口施設であると思われる。

【遺物出土状況】 全点ドット方式で遺物を記録したが、土器は接合したものを含めず全部でのべ70点、石器及び剥片類は礫等を含めて107点であり、該期の在り方として非常に少ない。大部分は覆土中からのものであるが、

炉の周辺の床面上から土器片の出土がみられる。試掘時に採取した土器片は土層図からみて覆土上層に含まれるものと思われる。土器の接合関係は覆土中のものでいくつかみられた。また炉周辺床直上の土器が覆土中のものと接合している。炉体土器の口縁部片が炉周辺床直上のものと接合したほか、覆土上層のものとも接合しており、炉体土器埋設時に欠いた土器片が住居近隣に廃棄され、短期間に埋没したものと思われる。炉体土器は試掘調査時に確認した土器とも接合しており、試掘調査時には出土位置の記録をとっていないが住居土層図に表されているように住居床面までは確認しておらず、覆土中からの出土であることがわかる。石器類についてはいずれも覆土中からの出土である。

【遺物】 土器の他、石器や剥片、礫などが出土している。石器は、打製石斧・石匙の完形もしくは欠損品があり、この中に磨石と思われる円盤がみられる。磨石に凹石等の加工したものは存在していない。また黒曜石についてはわずかに小片が2点みられるのみであった。

1、炉体土器で新しく設置されたものである。口唇部には四単位の突起が付き、胴部文様は隆線により区画され、幅広の連続押圧文とベン先状工具による連続刺突文がみられる。隆帶上は半裁竹管状工具による連続した刻みが施される。胴部下半は欠損するがパネル文が配置される。区画内には三叉文が施されている。2、炉体土器で、口縁部及び底部を欠き、胴部1/3が残る。全体に被熱による摩耗がみられ、覆土中の土器片といずれも接合しなかったため、1より先に埋設されたものと思われる。胴部にはサンショウウオ状の抽象文が施され、頭部・体部側は粘土板貼付による表現であるが、尾部は隆線によっている。胴部は縱方向に隆線が垂下し、先端でまるくなる。尾部は隆線一本で表現されている。隆線には幅広の連続爪形文が隆線に沿い、その外側には三角押文あるいは波状沈線が施される。地文部には縄文が施文されている。抽象文が一部隆線で表現され、また波状沈線が三角押文と併存していることからやや新しい様相を示している。1との埋設の先後関係にいささか問題がある。3、覆土中より出土した土器片で接合している。口縁部約1/4の破片である。口縁部には重三角区画文が隆線により表現され、内部は連続する三角刺突文と玉抱三叉文が施される。頭部には指頭圧痕がみられる。4、覆土中と試掘時のもので接合している。口縁部破片で、眼鏡状突起と菱形状モチーフが見られ隆線に沿って連続する三角刺突文が施されている。7、炉周辺の床面直上から出土し覆土中のものと接合している。開いた筒形の深鉢形土器で、横帯格円区画文がみられ、連続する三角刺突文が隆線に沿う。9、覆土中と試掘時のもので接合している。胴部破片で、三角区画文及び格円区画文となり、隆線に沿って幅広の連続三角押圧文が施されている。33、底部破片で、立ち上がりの部分が近くの土器片と接合した。平行四辺形状のモチーフがみられ、幅広の連続三角押圧文が隆線に沿って施されている。32、浅鉢の破片で、覆土中で接合している。35、小形の石匙で刃部は片側からの剥離による。36~39は中形の石匙。40~46は打製石斧で、刃部あるいは基部を欠損したものがある。47~52は磨石と思われるが、自然の円盤を利用している。50の表面には被熱し煤けた部分がある。53~55は角柱状の石器で敲石と思われる。加工した形跡はなく、自然石を利用している。

【時期】 土器の特徴で、連続三角刺突文や三叉文が多用されることなどから、勝坂式土器様式の新道式第2段階に位置付けることができ、ほぼこの時期に限定されるものと思われる。

2号竪穴住居跡（第11~13図）

【位置】 E・F-10・11グリッドに位置する。調査区域の北端部にあり、調査の過程で住居跡であると判断し、急速調査区域を北側に拡張し、全掘した。

【形状・規模】 隅丸方形で、やや北側に傾いて主軸を東西方向にとる。南北方向で5.3m、東西5.4mを測る。

【覆土】 レンズ状堆積を示し、自然堆積と思われる。最終埋没土の1層は黒褐色土で、2層は暗褐色土となり、床面上の3層はかたくしまった暗黄褐色土となる。下層ほどしまりが強く、色調も明るくなる。覆土上層部には近代頃の擾乱層があり、当初は遺物の出土がなく、住居跡としてとらえることができなかった。

【壁・周溝】 壁はやや傾くがほぼ垂直に近く直線状に立ち上がる。確認面からの深さは55cmで、比較的深い。周溝は、住居北辺から西辺にかけて壁際に沿ってみられる。幅12cm、深さは一定しないがおよそ5cmである。

【柱穴】 隅丸方形となるその四隅に4本の配置となる。深さは北隅のピット1が55cm、ピット2が、58cm、南

隅のピット3が63cm、ピット4が38cmを測る。ピット2からは磨り石が出土している。

[炉] 住居の床面中央からやや西よりで主軸上に、地床炉がみられる。ほぼ円形の浅い掘り込みがあり、比較的明るい黄褐色土が堆積している。深さは25cm程である。床面とほぼ同じレベルの覆土上層にわずかな焼土粒がみられるのみであった。

[遺物出土状況] 覆土中層から下層にかけての2層と3層の境あたりの出土が多いが、わずかに土器片・石器類が出土したのみである。土器片は全点ドット方式で取り上げたが、その総数はわずか34点である。調査着手時に落ち込みを確認したが、近代の攪乱があって縄文時代の遺物の出土もなく、また覆土下層が確認面の地山層と似た色調であり、精査するまで住居跡であるという認識がなかった。

[遺物] 1、口縁部破片で、口唇部に鋭いへら状工具による斜位の刻みが施されているが他は無文である。2、口縁部破片で、貝殻条痕が斜格子状に施文されている。3、薄手無文土器でわずかに屈折している。5～15は、胎土に纖維を含み、いずれも無文である。16、17は打製石斧。18、19は磨石と思われる。20、21は黒曜石製の石鏃で、22は黒曜石製で刃部を形成しているが器種は不明。

[時期] 土器の特徴から縄文時代前期初頭頃に位置付けできる。

第2節 土坑

調査区のはば東側に比較的散在しながらも多く分布する。地形的にはやや高くなった部分であり、住居跡はこの微高地の縁辺部にあって、その西側は緩いながらも低く傾斜していく。土坑は小さく浅いもの他、長楕円形で比較的深いものが9基みられた。形状から墓坑あるいは貯蔵穴とは考えにくく、長楕円形で壁の立ち上がりも比較的きつく底面も狭いことから陥穴の性格と推定しておきたい。出土遺物はきわめて少ないが、中期土器片がわずかに出土しており、1号住居跡とはば同時期かもしくは若干古い時期に位置付けることができる。中期の陥穴事例として、早期にみられるものとはその底面に小さなピットがみられず、形状をやや異なるものであるが、小動物がいるには適当な大きさと深さを備えており、陥穴である可能性を考慮したい。

J-11土坑1（第14図）

形状は小さな円形で、南北60cm、東西60cm、深さ32cm、遺物の出土はない。

J-11土坑2（第14図）

形状は不整円形で、南北1.6m、東西1.3m、深さ10cmと浅い。遺物の出土はない。

J-11土坑3（第14図）

円形で、南北1.4m、東西1.3m、深さ12cmと浅い。遺物の出土はない。

K-11土坑1（第14図）

不整円形で、南北100cm、東西100cm、深さ10cmと浅い。遺物の出土はない。

K-11土坑2（第14図）

不整円形で、南北110cm、東西110cm、深さ16cmと浅い。遺物の出土はない。

I-9土坑1（第15図）

小さな土坑で、単なる地山のくぼ地である可能性が高い。不整円形で、長軸1.4m、短軸0.9m、深さ10cmと浅い。土器片が1点出土している。時期については土器が小片のため明かでないが、薄手で撚糸文が施文されていくことから早期のものとも思われる。

I-9土坑2（第15図）

円形で、長軸80cm、短軸70cm、深さ5cmと浅い。遺物の出土はない。

I-10集石土坑（第15図）

形状は不整な長楕円形で、長軸2.0m、短軸1.4m、深さ45cm、北側に木根痕がある。径5cm前後の礫が敷き詰められており、その下に円礫が置かれていた。小礫は被熱により赤化している。土坑からの出土遺物の出土は見られなかったが、すぐ近くから縄文時代中期の土器が出土しており、縄文時代の集石土坑と思われる。

I-9 土坑3 陥穴・風倒木痕（第16図）

長楕円形で、東西方向に主軸をとり、長軸3.4m、短軸1.8m、深さ70cmを測る。大形でやや深い。底面は平坦で、壁の立ち上がりは長軸方向で斜めに立ち上がっていく。西側は大きな風倒木痕により攪乱を受けている。覆土はレンズ状堆積を示し、自然堆積と思われる。打製石斧が1点覆土中より出土している。

I-9 土坑北（第16図）

不整形な円形を呈し、南北1.8m、東西1.7m、深さ40cmを測る。壁はゆるくくぼんだ形状で、覆土中より土器片が1点出土している。土器は半裁竹管内面による並行条線が浅く施されている。

H-9 土坑 陥穴（第17、18図）

長楕円形で、南北方向に主軸をとり、長軸4.8m、短軸2.7m、深さ105cmを測る。大形でやや深い。底面は凹凸があり、壁の立ち上がりは長軸方向及び西側で斜めに立ち上がっていく。東側壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側は中央付近で溝状にえぐられるようになっている。覆土はレンズ状堆積を示し、自然堆積と思われるが、後世の木根痕と思われる攪乱がみられる。土器片が覆土下層より1点出土しているほか、遺物は打製石斧片が3点みられたのみである。土器は摩耗によりはつきりしないが、連続爪形文が施されており、中期中葉に位置付けできる。打製石斧はいずれも刃部が破損しており、廃棄されたものと思われる。

I-8 土坑 小陥穴（第18図）

形状は東西方向に主軸を持つ不整な楕円形で、長軸2.5m、短軸1.3m、深さ60cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩く開くようであるが、南側はややきつくなっている。覆土はレンズ状堆積を示しており自然堆積と思われる。土器が1点底面近くから出土しているが、小片のため明かでない。

K-9 土坑（第18図）

円形で、南北1.6m、東西1.5m、深さ23cmと浅い。遺物の出土はない。

K-8 土坑（第18図）

円形で、南北108cm、東西108cm、深さ10cmと浅い。遺物の出土はないが、同じグリッドで土器片が1点出土している。土器は、棒状工具で沈線が引かれており、中期初頭五領ヶ台式に位置付けできる。

I-8 土坑2（第19図）

円形で、長軸68cm、短軸65cm、深さ12cmと浅く、北側は木根痕による攪乱を受けている。遺物の出土はない。

K-7 土坑 小陥穴（第19図）

形状は南北方向に主軸を持つ長楕円形で、長軸2.6m、短軸1.3m、深さ40cmを測る。底面はほぼ平坦だがやや傾斜している。壁の立ち上がりは開いてややきつくなっている。覆土はレンズ状堆積を示しており、自然堆積と思われる。底面近くから中期の所産の土器片が一点出土している。土器は繩文地文で渦巻沈線が施されている。

H-5 土坑 陥穴（第19図）

形状はほぼ東西方向に主軸を持つ楕円形で、北側上端部に小さなテラス状の張り出しがある。長軸2.8m、短軸2.0m、深さ95cmを測る。底面はほぼ平坦で、円碟が底面より出土している。壁の立ち上がりはやや傾斜しているがきつく、南側ではほぼ垂直に近く立ち上がっている。覆土はレンズ状堆積を示しており、自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

G-5 土坑 小陥穴（第20図）

主軸を北東から南西にとり、小さな楕円形で、長軸1.8m、短軸1.2m、深さ62cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはきつくやや開くようになる。覆土はレンズ状堆積を示しており、自然堆積と思われる。底面近くより土器が一点出土した。土器は隆線による楕円区画内を斜位の角押文で充填する。中期中葉猪沢式に比定できる。

G-4・5 土坑 小陥穴（第20図）

主軸はG-5土坑と直交するように北西から南東にとる小さな楕円形で、長軸2.0m、短軸1.1m、深さ65cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は南側に向かって緩く立ちあがっていく。北側の壁はえぐれるようにオーバーハングしている。覆土はレンズ状堆積を示しており、自然堆積と思われる。

J-4 土坑 陥穴（第20図）

主軸をほぼ北東から南西にとり、不整な長楕円形で、北西側にやや張り出している。長軸2.8m、短軸1.6m、深さ90cmを測る。底面はくぼんだ様相を呈している。壁の立ち上がりは北東側でやや緩いが他はややきつく立ち上がっている。覆土はレンズ状堆積を示しており、自然堆積と思われる。土器は覆土上層中より一点みられた。土器は口縁部の小片で、角押文が横位に施されており、中期中葉猪沢式に比定できる。

H-4 土坑 陥穴（第21図）

形状はほぼ東西方向に主軸を持つ長楕円形である。長軸4.0m、短軸1.8m、深さ80cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはやや傾斜して聞くようになっている。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土はレンズ状堆積を示しており、東側からの流れ込みによる自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

E-10 土坑（第21図）

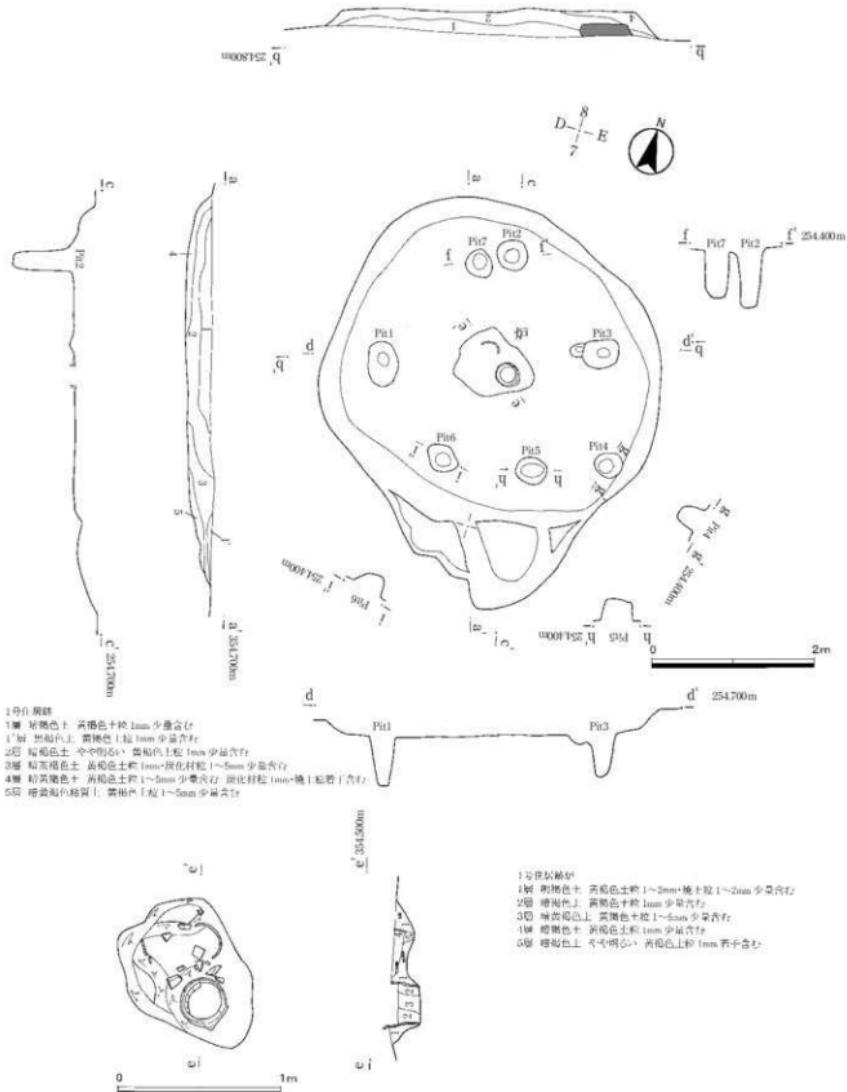
形状は小さな不整形で、北側は調査区外となる。南北1.8m、東西1.3m、深さ55cmを測る。木根痕とも思われるが、打製石斧片が1点出土した。

I・J-2・3 土坑 焼土を伴う（第21図）

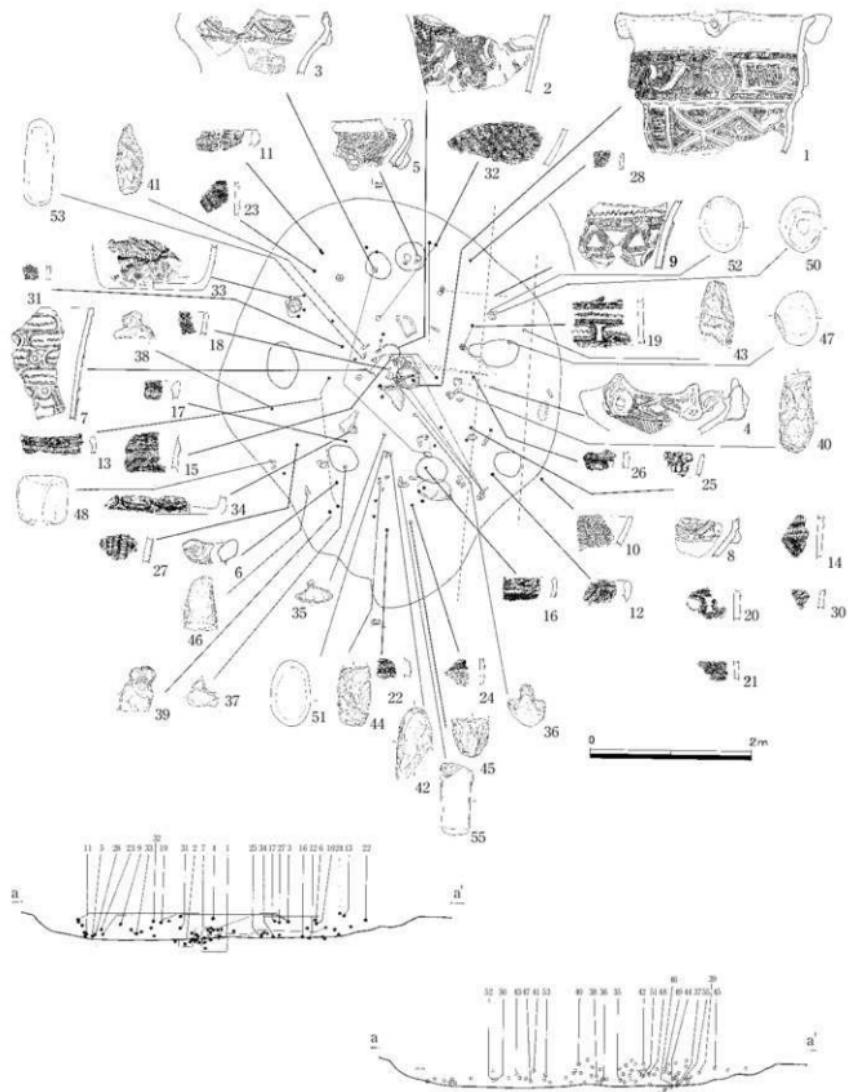
形状は不整なアーベー状を呈しており、北西から南東方向とさらに北東から南西方向に張り出した十字形状である。北西方向で4.6m、北東方向で3.76m、深さ約20cmを測るが底面は凹凸が著しい。木根痕とおもわれるが、北東側底面より焼土がまとまって検出された。出土遺物はなく、覆土中に焼土粒が多く見られるものの炭化材片はほとんど見られなかった。性格不明。

その他の出土遺物（第21図）

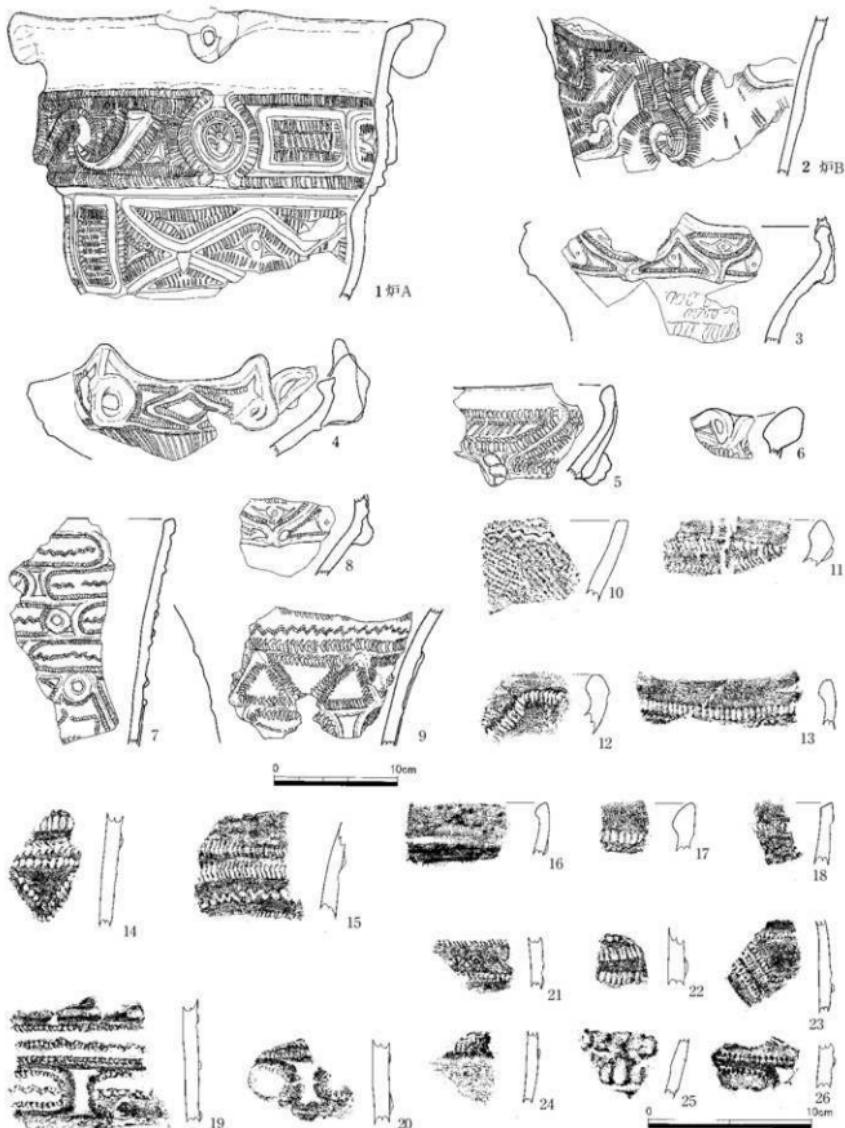
排土中より石鏃一点がみつかった。黒曜石製で先端部と逆刺部分を欠損している。



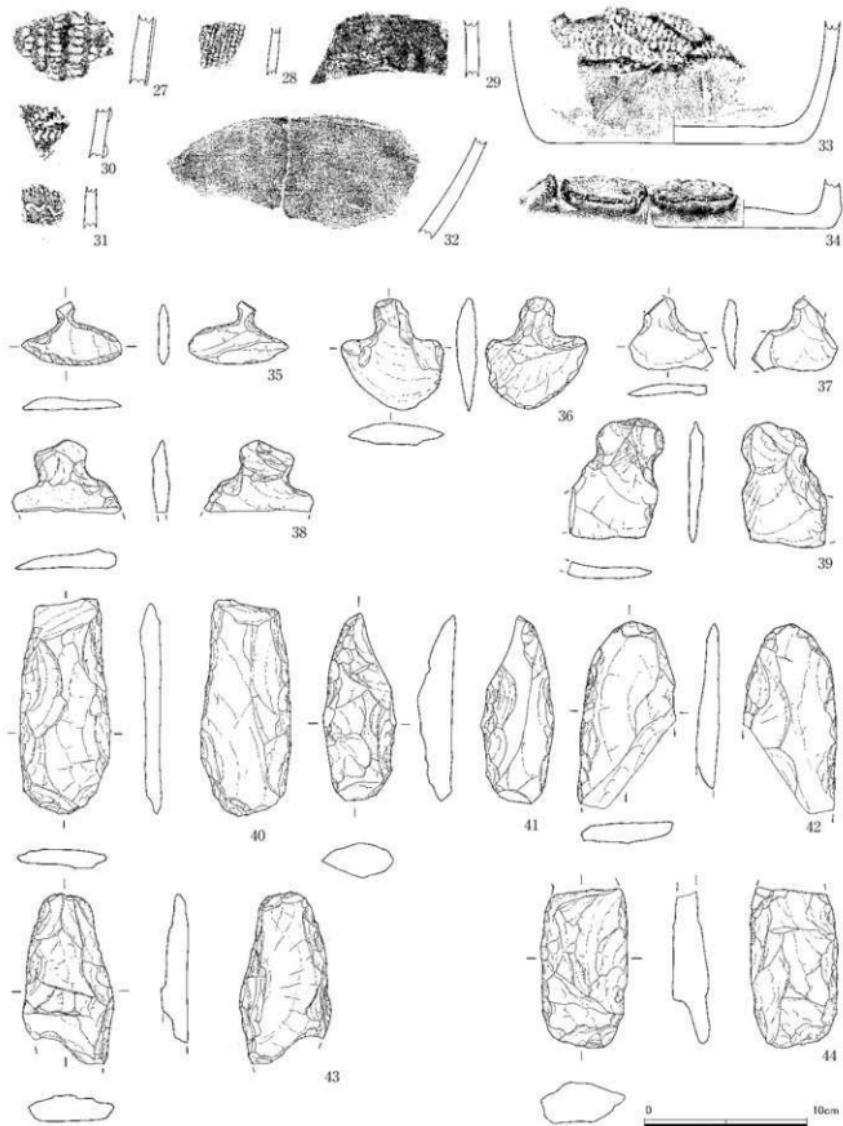
第6図 1号住居跡



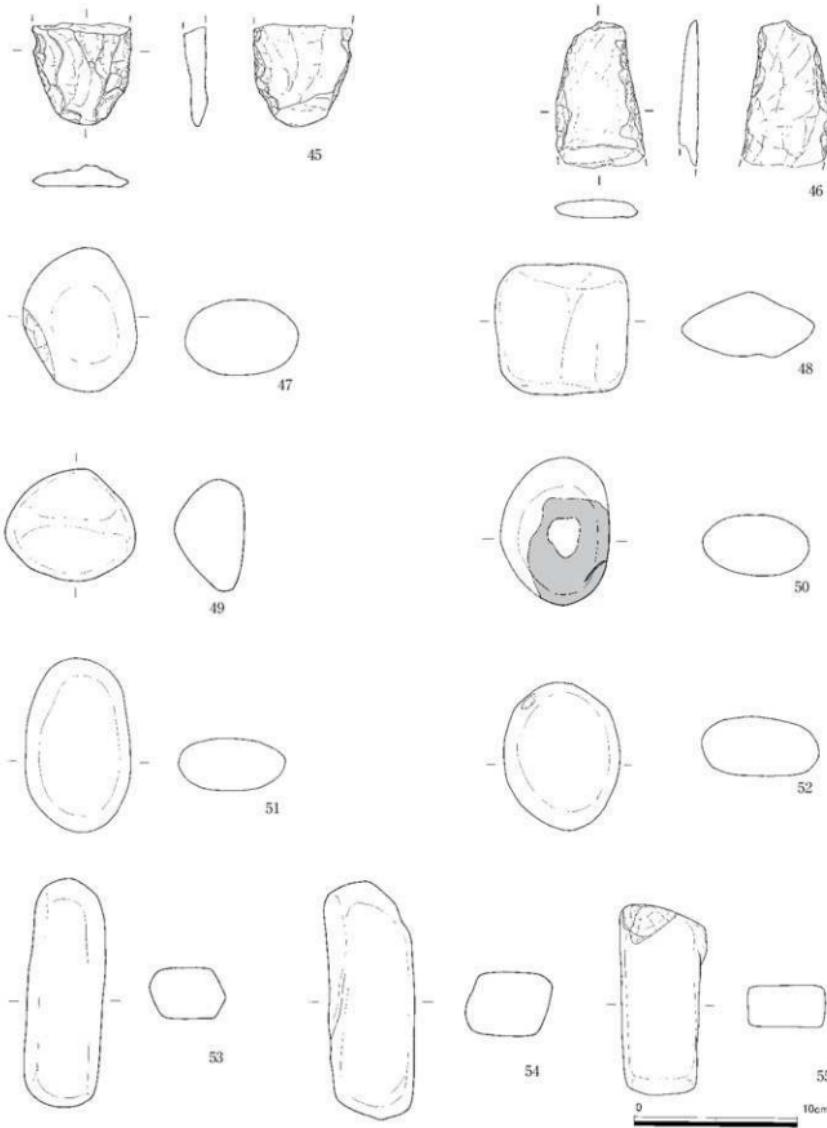
第7図 1号住居跡遺物出土状況



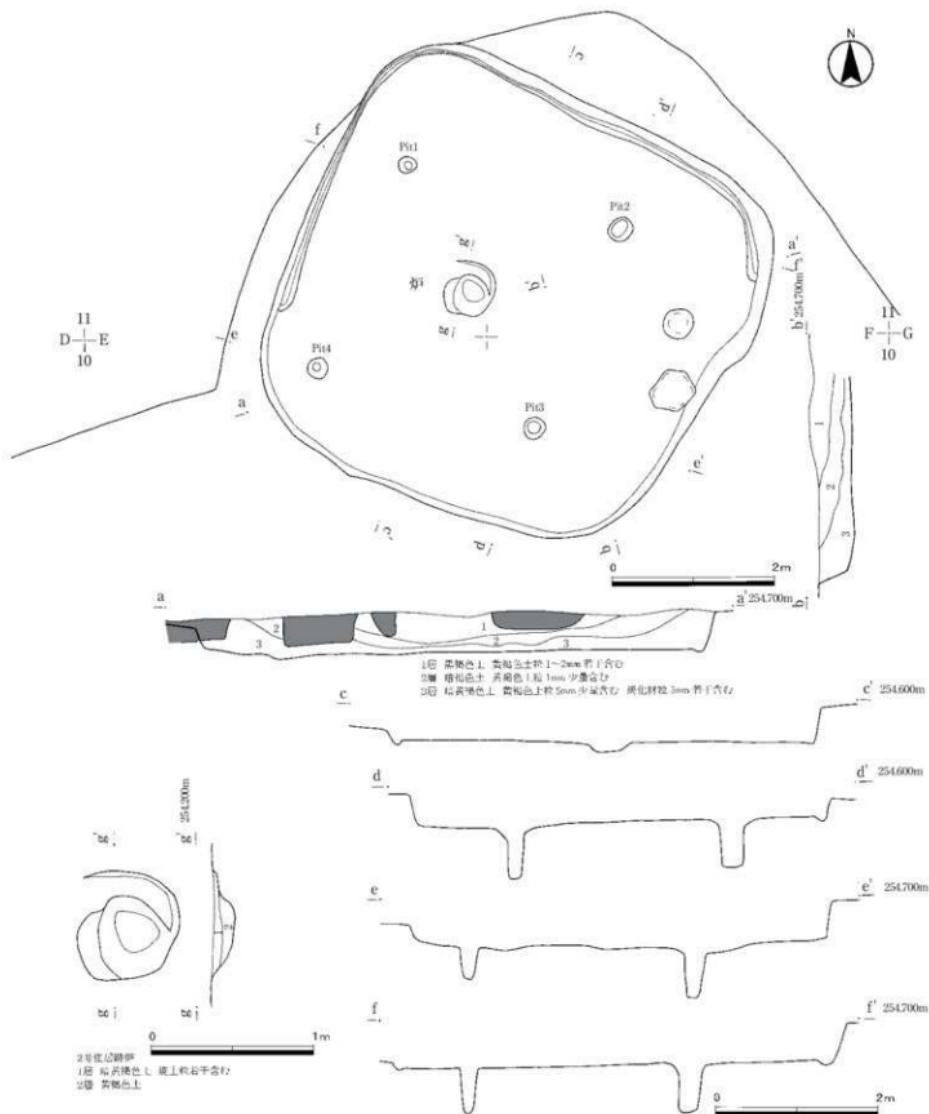
第8図 1号住居跡出土遺物（1）



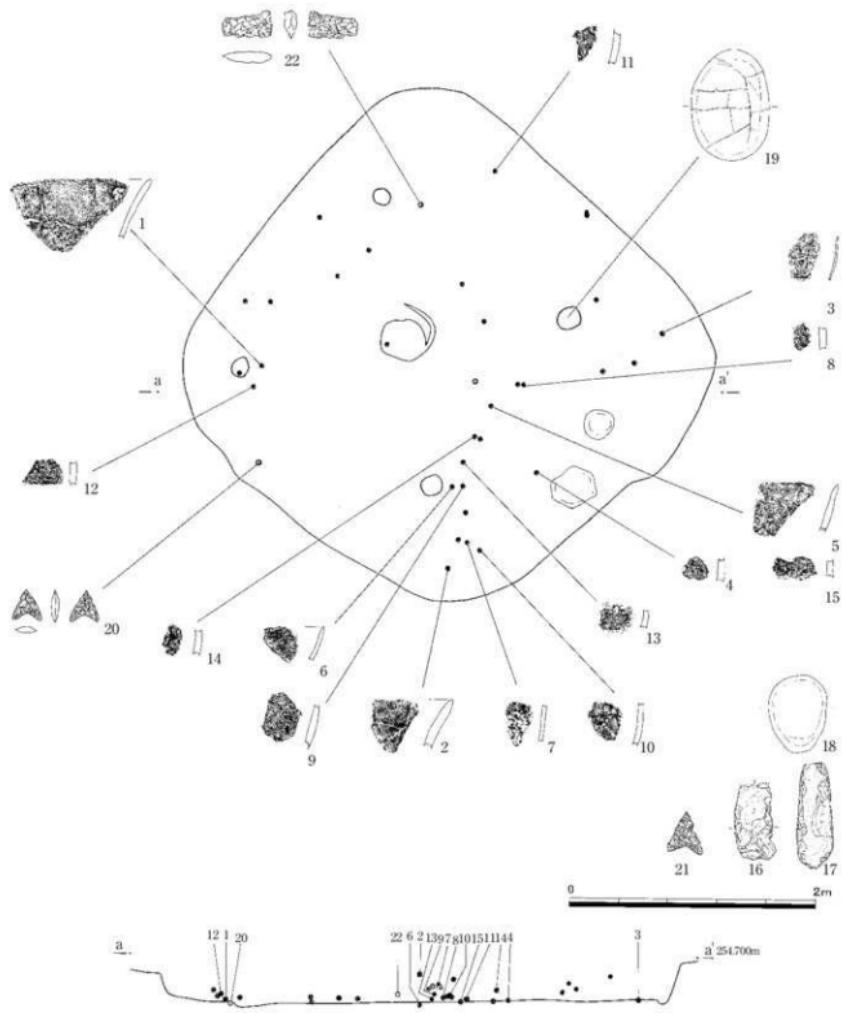
第9図 1号住居跡出土遺物（2）



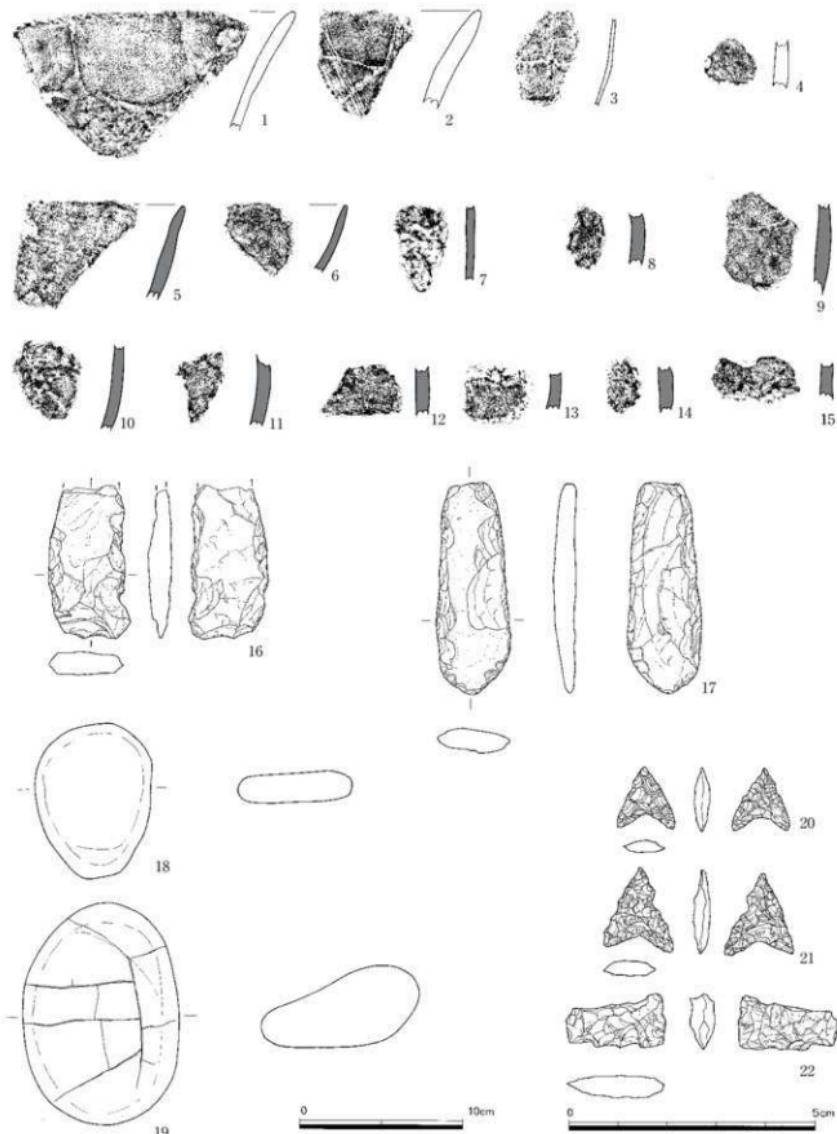
第10図 1号住居跡出土遺物（3）



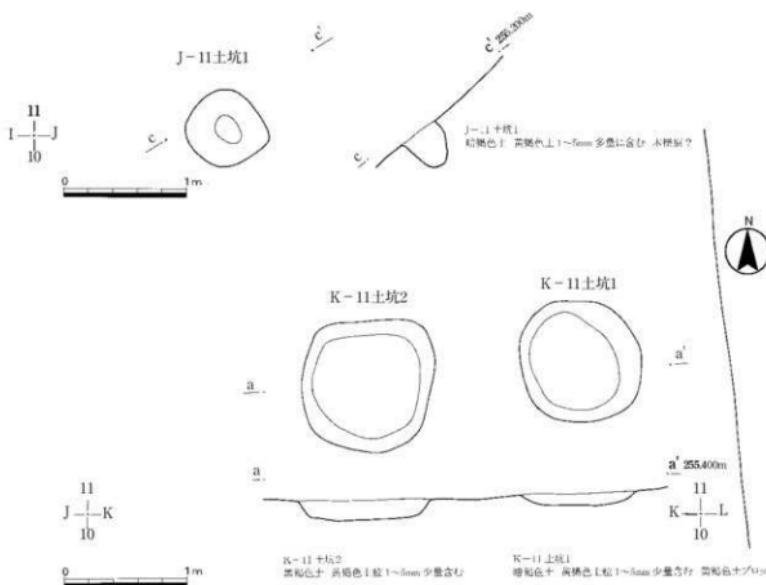
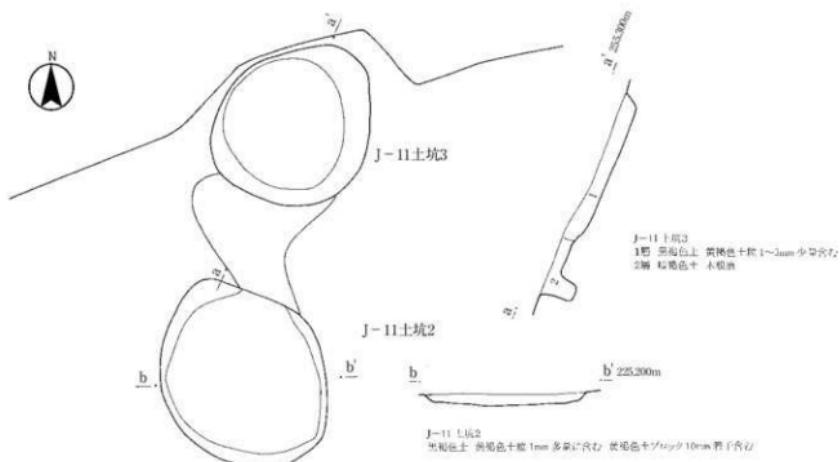
第11図 2号住居跡



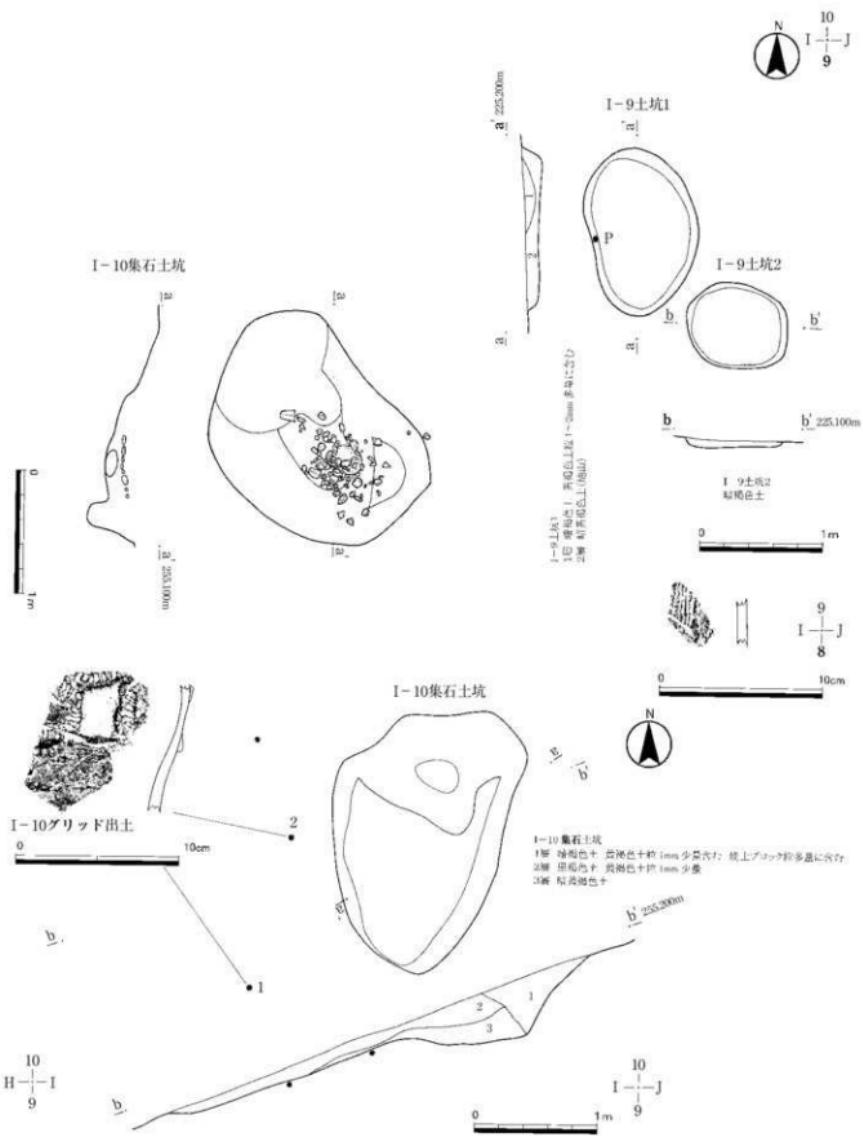
第12図 2号住居跡遺物出土状況



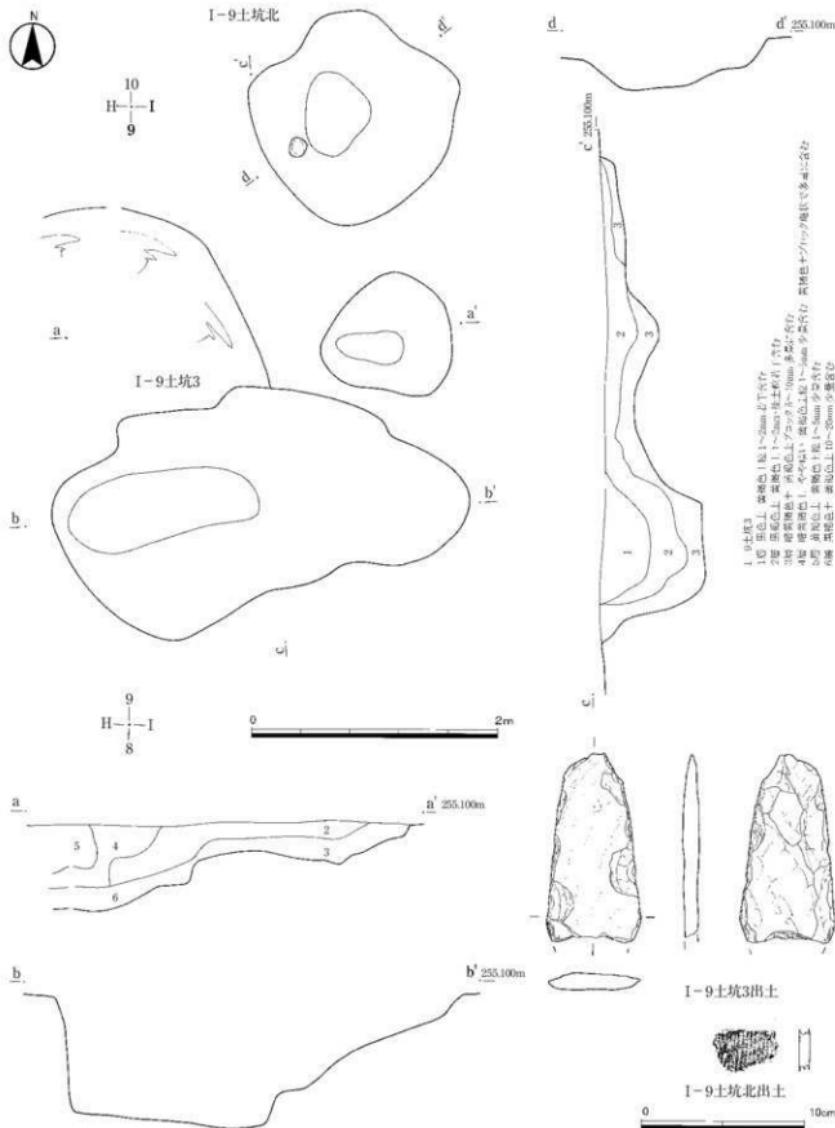
第13図 2号住居跡出土遺物



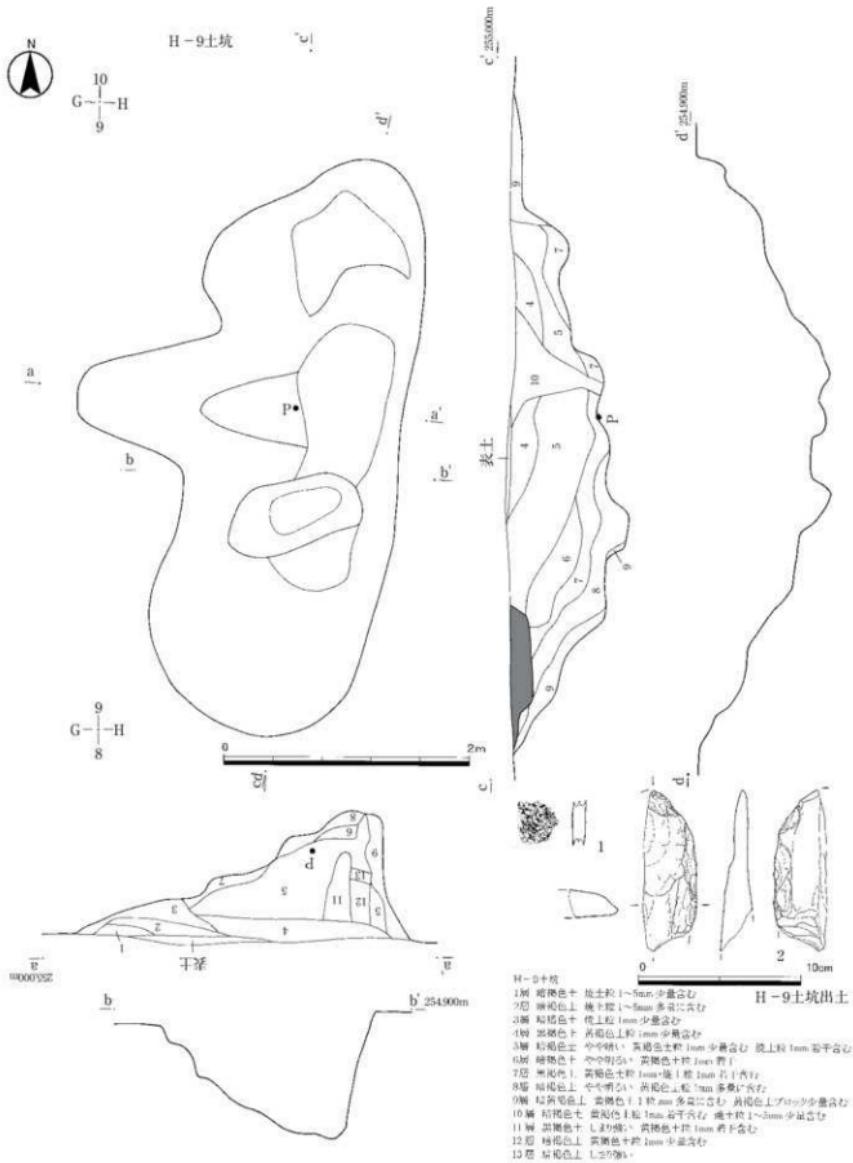
第14図 土坑 (1)



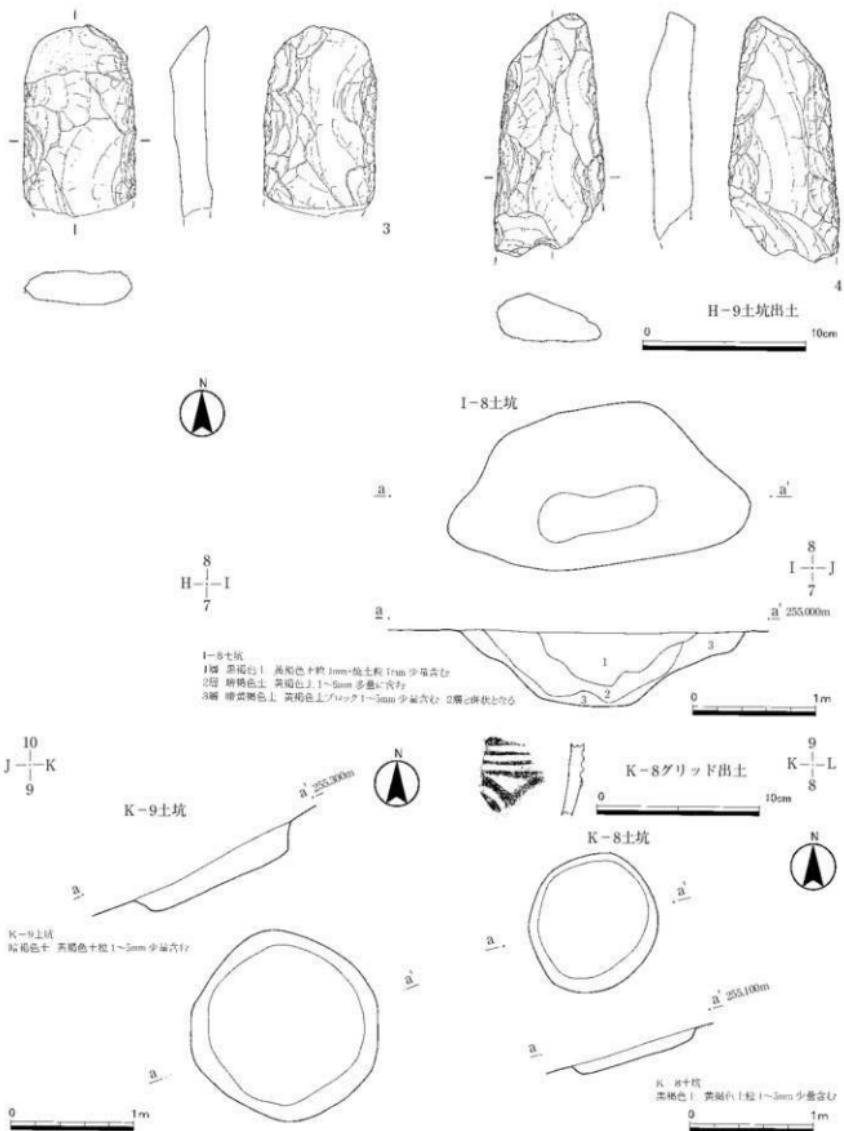
第15図 土坑（2）



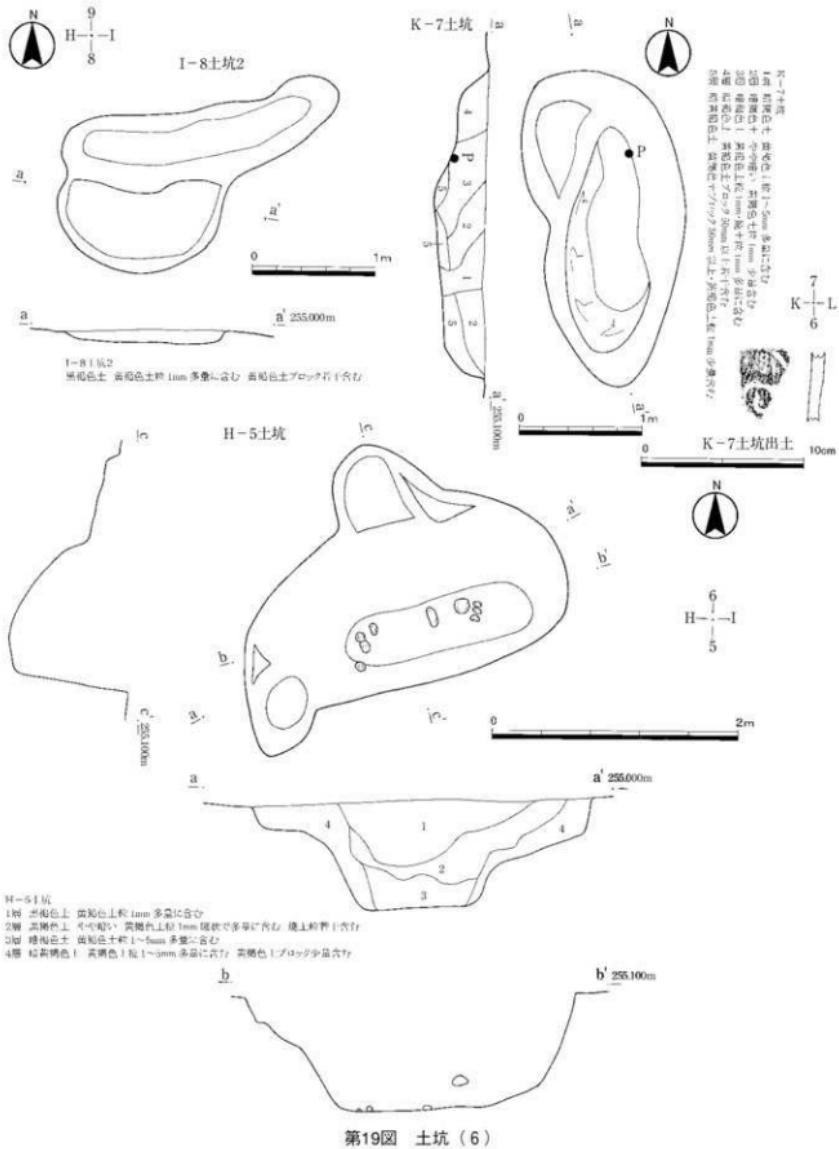
第16図 土坑（3）

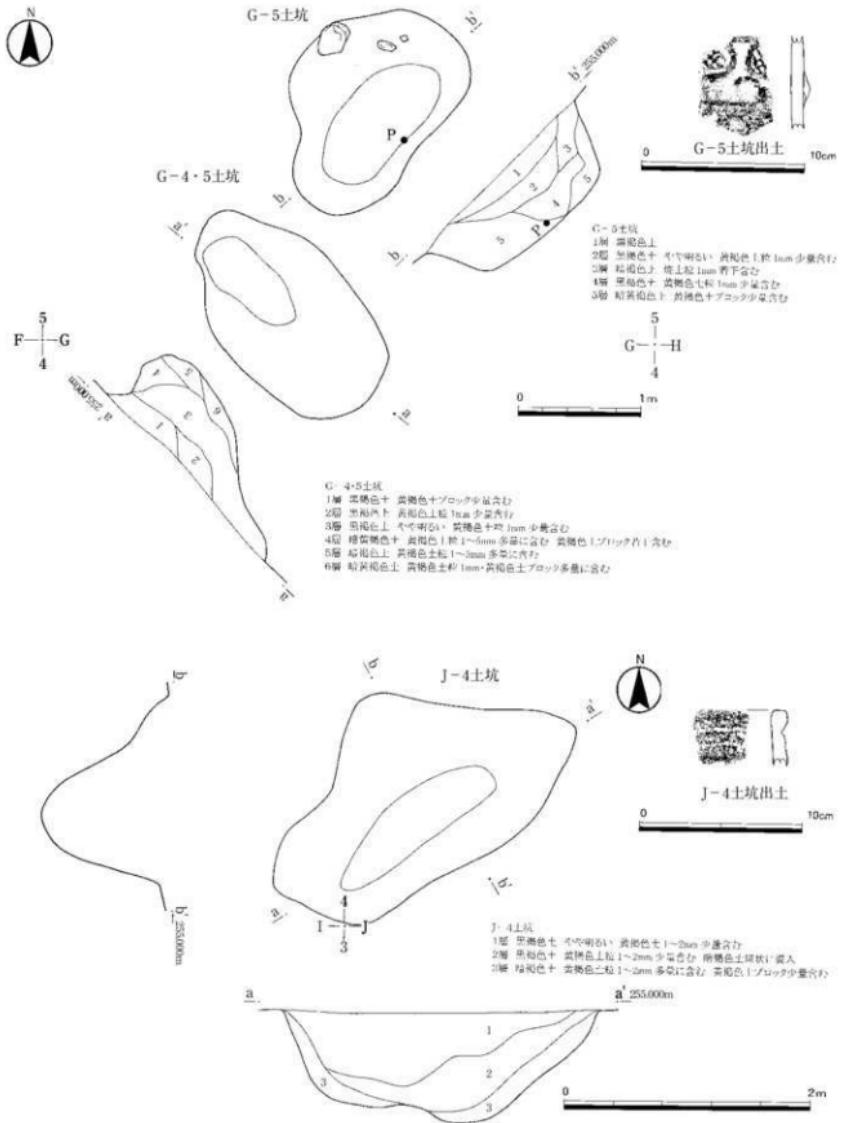


第17図 土坑 (4)

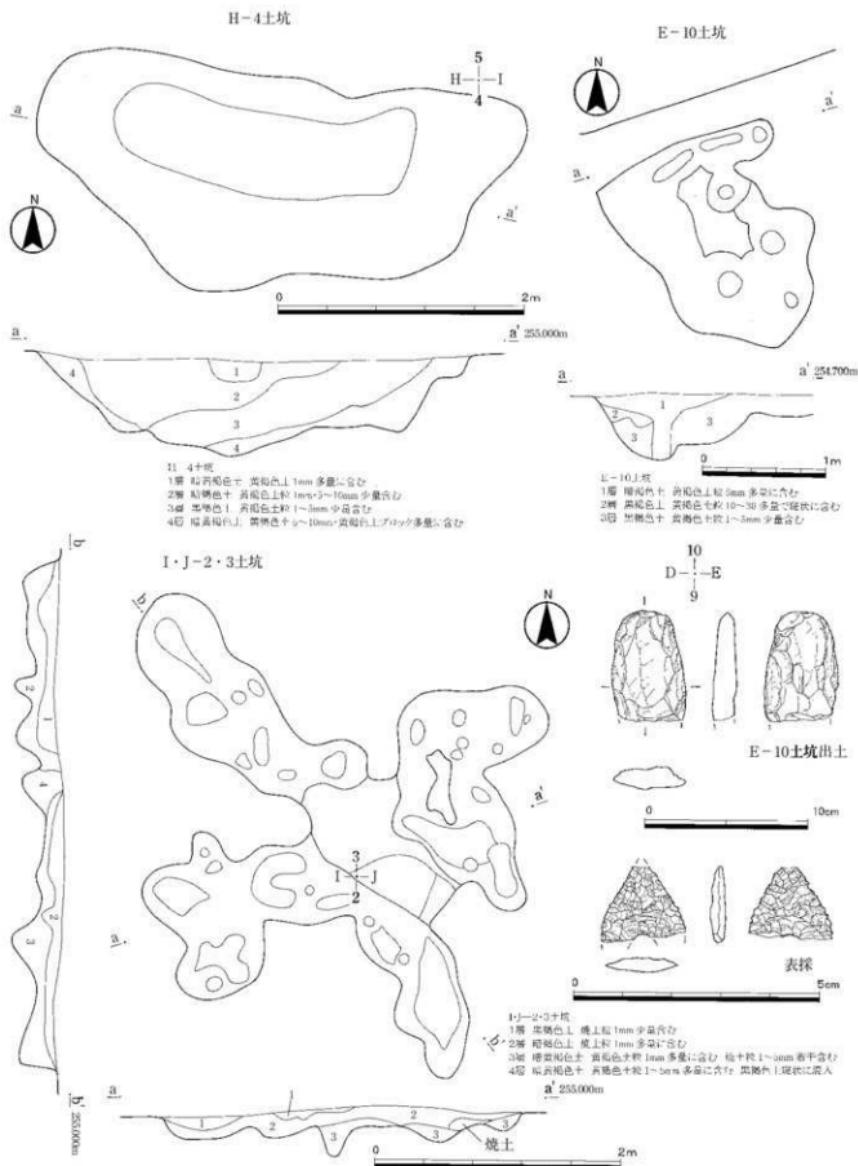


第18図 土坑 (5)





第20図 土坑 (7)



第1表 土器觀察表

遺構	図版番号	遺物番号	器種	残存率	色調	胎土	整形・施文	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備考
1号住居跡	第8図1	炉A+炉125.6+22.46+48+試掘	深鉢	口縁?側部70%	明褐色	砂粒多	幅広連続爪形文と連續する三角刺突文、三叉文	300			炉埋設新
1号住居跡	第8図2	炉B	深鉢	側部1/3	明褐色	砂粒多	幅広爪形文、少波状沈線、施文				炉埋設古
1号住居跡	第8図3	47+17+44	深鉢	口縁部片	明褐色	砂粒多	隆線に沿って三角押文、頭部指頭圧痕	(252)			
1号住居跡	第8図4	40+試掘	深鉢	口縁部1/4	明褐色	砂粒少	隆線に沿って三角押文	(252)			
1号住居跡	第8図5	43	深鉢	口縁部片	褐色	砂粒少	隆線に沿って連続爪形文+三角押文				
1号住居跡	第8図6	10II	深鉢	突起片	明褐色	砂粒多	幅広連続爪形文				
1号住居跡	第8図7	23+炉39.10	深鉢	口縁?側部1/2	明褐色	砂粒少	隆線に沿って三角押文				底部内面炭化物付着
1号住居跡	第8図8	試掘	深鉢	口縁部下片	明褐色	砂粒少	隆線に沿って三角押文				
1号住居跡	第8図9	42+試掘	深鉢	側部1/5	明褐色	砂粒多	隆線に沿って幅広三角押文				
1号住居跡	第8図10	51	深鉢	口縁部片	赤褐色	砂粒多	施文RL横、小波状沈線				
1号住居跡	第8図11	15II+16II	深鉢	口縁部片	赤褐色	砂粒多	連続爪形文				やや摩耗
1号住居跡	第8図12	26	深鉢	口縁部片	暗褐色	砂粒多	連続爪形文				やや摩耗
1号住居跡	第8図13	6+11II	深鉢	口縁部片	明褐色	砂粒多	連続爪形文、三角押文				
1号住居跡	第8図14	試掘	深鉢	側部片	明褐色	砂粒少	連続爪形文、三角刺突文				
1号住居跡	第8図15	炉12	深鉢	側部片	明赤褐色	砂粒多	幅広連続三角押文				やや摩耗
1号住居跡	第8図16	25	深鉢	口縁部片	赤褐色	砂粒少	隆線				やや摩耗
1号住居跡	第8図17	7	深鉢	口縁部片	暗褐色	砂粒多	連続爪形文				
1号住居跡	第8図18	炉4	深鉢	口縁部片	明褐色	砂粒少	三角刺突文				
1号住居跡	第8図19	14+41+試掘	深鉢	側部片	明赤褐色	砂粒多	三角刺突文				
1号住居跡	第8図20	試掘	深鉢	底部片	明褐色	砂粒多	三角刺突文				
1号住居跡	第8図21	試掘	深鉢	側部片	明赤褐色	砂粒少	三角刺突文				
1号住居跡	第8図22	37	深鉢	側部片	明褐色	砂粒多	連続爪形文				
1号住居跡	第8図23	2	深鉢	側部片	赤褐色	砂粒少	三角刺突文				
1号住居跡	第8図24	12II	深鉢	側部片	赤褐色	砂粒多	三角刺突文				
1号住居跡	第8図25	31	深鉢	頭部片	明褐色	砂粒多	指頭圧痕				
1号住居跡	第8図26	30	深鉢	側部片	赤褐色	砂粒多	三角刺突文				
1号住居跡	第9図27	9	深鉢	側部片	暗褐色	砂粒多	連続爪形文				
1号住居跡	第9図28	29	深鉢	側部片	明褐色	砂粒少	施文R多寮痕				
1号住居跡	第9図29	5/8	浅鉢	側部片	赤褐色	砂粒多	無文				
1号住居跡	第9図30	試掘	深鉢	側部片	明褐色	砂粒少	三角刺突文				
1号住居跡	第9図31	5	深鉢	側部片	赤褐色	砂粒少	三角刺突文				
1号住居跡	第9図32	18+45	浅鉢	側部片	明赤褐色	砂粒多	沈線				
1号住居跡	第9図33	3+4+50	深鉢	底面部	明褐色	砂粒多	連続柄付三角押文	180			
1号住居跡	第9図34	49	深鉢	底面部	赤褐色	砂粒多	三角刺突文	(126)			内面やや煤け
2号住居跡	第13図1	34	深鉢	口縁部片	明褐色	砂粒多	口唇部に刷毛				
2号住居跡	第13図2	12	深鉢	口縁部片	暗褐色	砂粒多	格子状の貝殻系痕				
2号住居跡	第13図3	29	深鉢	側部片	明褐色	砂粒少	無文				内外面器面荒れ
2号住居跡	第13図4	9	深鉢	側部片	暗褐色	砂粒多	無文				全体やや煤け
2号住居跡	第13図5	2	深鉢	口縁部片	暗褐色	砂粒少	楕羅多				脆い
2号住居跡	第13図6	11	深鉢	口縁部片	黑褐色	砂粒少	楕羅多				
2号住居跡	第13図7	1	深鉢	側部片	暗赤褐色	砂粒少	楕羅多				脆い
2号住居跡	第13図8	10	深鉢	側部片	明褐色	砂粒少	楕羅多				無文
2号住居跡	第13図9	5	深鉢	側部片	赤褐色	砂粒少	楕羅多				内面明黒褐色
2号住居跡	第13図10	2	深鉢	底面部	明赤褐色	砂粒少	楕羅多				内面お焦げ
2号住居跡	第13図11	22	深鉢	底面部	赤褐色	砂粒少	楕羅多				内面お焦げ
2号住居跡	第13図12	33	深鉢	側部片	暗褐色	砂粒少	楕羅多				内面明黒褐色
2号住居跡	第13図13	6	深鉢	底面部	暗褐色	砂粒少	楕羅多				内面明黒褐色

遺構	図版番号	遺物番号	器種	残存率	色調	胎土	整形・施文	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備考
2号住居跡	第13図14	26	深鉢	嗣部片	明赤褐色	砂粒少 緻密少	無文				
2号住居跡	第13図15	8	深鉢	嗣部片	暗褐色	砂粒少 緻密少	無文				
I-10Grid	第15図	12	深鉢	嗣部片	明褐色	砂粒多	幅広、キャラビラ文				内面底状剥離
I-9土坑	第16図		深鉢	嗣部片	明黒褐色	砂粒少 緻密	R撲糸文、薄手				早期?
I-9土坑北	第16図		深鉢	嗣部片	明褐色	砂粒多	半裁竹管内面による 浅い並行沈線				?
H-9土坑	第17図1		深鉢	嗣部片	明赤褐色	砂粒多	速純爪形文				中期中業
K-8土坑	第18図		深鉢	嗣部片	暗褐色	砂粒多 雲母少	降線に丸棒工具によ る沈線				中期初頭五領ヶ台式
K-7土坑	第19図		深鉢	嗣部片	赤褐色	砂粒多 雲母少	RL横縄文地文に溝巻 沈線				中期中業
G-5土坑	第20図		深鉢	嗣部片	赤褐色	砂粒多 雲母少	捨円区画に角押文				中期中業落式
J-4土坑	第20図		口縁部片	暗褐色	砂粒多	角押文					中期中業落式

第2表 石器観察表

遺構	図版番号	遺物番号	器種	形態	残存率	石材	所見	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
1号住居跡	第9図35	S-89	石匙	横	100%	真岩		38	60	7	14
1号住居跡	第9図36	S-21	石匙	横	100%	真岩		69	62	12	44
1号住居跡	第9図37	S-3	石匙	横	60%	真岩	柄部、刃部先端欠損	45	(53)	9	16
1号住居跡	第9図38	S-16	石匙	横	50%	真岩	刃部欠損	(44)	67	14	30
1号住居跡	第9図39	S-37	石匙	横	70%	真岩	粗製、刃部先端欠損	75	(52)	12	56
1号住居跡	第9図40	S-94	打製石斧	短彫形	100%	粘板岩		128	53	11	110
1号住居跡	第9図41	S-78	打製石斧	短彫形	100%	真岩		114	43	25	118
1号住居跡	第9図42	S-87	打製石斧	短彫形	60%	砂岩	先端部折損	(116)	57	14	84
1号住居跡	第9図43	S-41	打製石斧	彫形	60%	粘板岩	先端部折損	(103)	56	16	94
1号住居跡	第9図44	S-85	打製石斧	短彫形	60%	砂岩	先端部折損	(96)	52	24	148
1号住居跡	第10図45	S-34	打製石斧	彫形	30%	粘板岩	基部のみ	(63)	61	13	58
1号住居跡	第10図46	S-82	打製石斧	彫形	70%	粘板岩	先端部折損	(90)	52	11	66
1号住居跡	第10図47	S-42	磨石		90%	砂岩		87	69	46	360
1号住居跡	第10図48	S-80	磨石		100%	砂岩	やや煤付着	79	82	37	334
1号住居跡	第10図49	S-64	磨石		100%	砂岩		68	80	40	294
1号住居跡	第10図50	S-61	磨石		100%	砂岩	燃付着	90	65	38	304
1号住居跡	第10図51	S-88	磨石		100%	砂岩	表裏に擦痕顯著	116	65	33	348
1号住居跡	第10図52	S-60	磨石		100%	花崗岩		88	72	36	344
1号住居跡	第10図53	S-79	敲石		100%	凝灰岩		138	47	32	386
1号住居跡	第10図54	Pit5	敲石		100%	泥岩		145	51	39	578
1号住居跡	第10図55	S-95	敲石		100%	砂岩		116	49	26	326
2号住居跡	第13図16		打製石斧		80%	粘板岩		(94)	46	15	90
2号住居跡	第13図17		打製石斧		100%	粘板岩		129	44	15	110
2号住居跡	第13図18		磨石		100%	安山岩		93	71	21	192
2号住居跡	第13図19	Pit2	磨石?		100%	砂岩	亀裂多数	131	100	47	812
2号住居跡	第13図20	13	石礫		100%	黒曜石		12.4	11.2	2.5	
2号住居跡	第13図21		表採	石礫	100%	黒曜石		16.7	14.1	3.2	
2号住居跡	第13図22	21	不明		60%	黒曜石	刃部	(20.3)	11	4.7	
I-9土坑3	第16図		打製石斧	彫形	90%	粘板岩	刃部欠損	(114)	57	11	92
H-9土坑	第17図2		打製石斧	短彫形	20%	砂岩	刃部欠損、体部半裂	(99)	(32)	17	262
H-9土坑	第18図3		打製石斧	短彫形	60%	砂岩	刃部欠損	(116)	68	20	262
H-9土坑	第18図4		打製石斧	短彫形	70%	粘板岩	刃部欠損	(150)	64	30	356
E-10土坑	第21図		打製石斧	短彫形	40%	粘板岩	刃部欠損	(68)	44	13	58
表採	第21図		石礫		70%	黒曜石	逆剥欠損	(14.8)	(17.1)	3.1	

第IV章 考察

第1節 お宮横遺跡の性格について

縄文時代中期にかぎり、堅穴住居跡1軒と比較的深い土坑9基が検出されている。地表面観察や試掘調査の結果からも縄文時代中期の集落がひろく展開していたとは考えにくく、また住居跡から出土した土器なども、一般的な縄文時代遺跡に比べ非常に少ないことからも、いわゆる小規模遺跡といえる。住居跡の時期は縄文時代中期中葉の勝坂式土器様式のうち新道第2段階にはば限定でき、さわめて短期間に居住されていたものと考えられる。土坑その他から出土した土器では、わずかに古い中期初頭の五領ヶ台式土器と次期の猪沢式土器がみられる。遺跡の形成として、中期初頭に人の活動場所として土坑がつくられるなど利用が始まり、細々と継続されながら中期中葉にはいって堅穴住居がつくられ、すぐに廃絶、利用されなくなつたことがうかがわれる。堅穴住居の形態は特別なものでもなく一般的な規模を呈している。

この場所での活動は、石器類からある程度類推できる。ほぼ単時期に限定されるため該期の純粹な形での石器組成がわかる。住居跡出土の遺物は大部分が住居廃絶後に廃棄されたものであるが、石器類をみると、石匙、打製石斧、磨石、敲石に限定される。打製石斧は土掘り具の先端に装着されたものと考えられ、住居跡から7本出土している。うち5本は刃部あるいは基部を欠損しており、このため廃棄されたと思われる。中部地方の中期集落には多く見られるもので、根菜類の採取に使用されたと考えられている。石匙は皮剥などの携帯利器と思われ、5本出土しているうち3本は刃部を欠損している。磨石は特に加工されたものではなく自然円礫であり、表面に擦痕が認められるものがある。植物質食料の加工に使用されたと考えられ、住居跡からみつかっているやや大形の平石を台にしていたものと思われる。このように石器からは植物採集及び加工が行われていた可能性がある。この他に打製石斧は、比較的深く大きい土坑のI-9土坑3から刃部欠損したもの1点、H-9土坑でも刃部欠損したもの3点、E-10土坑で刃部欠損したもの1点が出土している。土坑内に廃棄されたものであろうが、こうした土坑を掘るにも使用された可能性がある。

土坑は、長楕円形を呈してその大きさ、深さ及び壁の立ち上がりから貯蔵穴や墓坑とは考えにくく、陥穴である可能性を考えたい。調査区東側にはばまとまって分布している。土坑底面に杭をさしたあとも見られず、土坑の配置にも明確な規則性はみられないが、中期土器片がわずかに出土しており、このころに構築、利用されていたものと思われる。

前期初頭の住居跡について、他に該期の遺構・遺物がみあたらいため性格は明らかでないが、住居跡からの出土遺物が非常に少ないことが共通し、やはり短期の一時的な利用であったものと思われる。出土遺物のうち石器組成に石鏽があり、狩猟の要素がうかがえる。

お宮横遺跡は、以上のように石器組成や土坑のありから縄文時代の集落であったというよりも狩猟・植物採集のための場であり、短期間だが堅穴住居をつくって居住したキャンプ地或いは出先地という性格であったと考え得る。集落本体はまた別の場所に存在していると思われ、その発見と本遺跡との関係が課題となる。

第2節 土器文様の特徴

1号住居跡出土土器は、幅広連続爪形文、三角押文による口縁部重三角区画文内に玉抱三叉文が施されており、こうした特徴から中期中葉勝坂式土器様式のうち新道式第2段階に位置付けられる。該期の例は、北杜市石原田北遺跡35号住居跡出土資料が典型とされる（石原田北遺跡発掘調査団2001）が、土器型式の組成にやや違いがみられる。

お宮横遺跡の土器では、重三角区画文を持つもの（8図3～6, 8）、口縁部に縄文施文で胴部にはおそらく抽象文となるもの（同図2, 10）、猪沢段階の系譜を引き楕円区画文を中心に構成されるもの（同図7, 19, 20）に分けることができ、さらに炉体土器のように口縁無文としてその下に横帶文で胴部をパネル文状にするもの（同

図1)がある。重三角区画文をもつものの胴部は三角区画文、楕円区画文が重帶するものと思われる(同図9, 14, 15)。底部文様も同様であろう(第9図33, 34)。これらに浅鉢形土器が加わる(同図29, 32)。

こうした組成で、北杜市石原田北遺跡35号住居跡出土資料で比較すると、いくつか該期型式が欠落していることがわかる。重三角区画文土器では、胴部が横帯文のみであり、渦巻状となるものがみられない。また、パネル文は炉体土器の一部文様にみられるのみで、次期に盛行する縦区画につながる土器がない。一方、炉体土器の口縁部を横帯文で構成する土器はほとんど例を見ないものである。お宮横遺跡での土器の出土は絶じて少ないものであり、また短期間の居住の可能性もあることから、生活財としては多くなく、こうした組成にも差があるものと思われる。なお、新道第2段階は、関東方面の多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした新地平編年では6b期に対比でき、AMSによる暦年校正された年代値は3350calBC~3330calBCに位置付けられる(小林他2004)。

2号住居跡の出土土器(第13図)は薄手無文土器を組成に含む。時期は明確にしがたいが前期初頭頃に位置付けられるものと思われる。また、纖維を含まない土器に貝殻条痕文、無文、および胎土に纖維を含む土器は在地系で、山梨県北杜市甲ツ原遺跡34号住居跡などに類例があり、これに近い時期の組成を成すものと思われる。出土遺物が少ないためはっきりしたことはわからないが、おそらく縄文時代前期初頭頃に位置付けられるものとしてとらえておく。国立歴史民俗博物館による年代測定値を参考にすると年代は6800年前頃となる(西本豊弘・小林謙一2004)。

第3節 1号住居跡の土器出土状況

本住居跡から出土した土器片はのべ60点で、大半が住居跡覆土中からの出土である。床面直上からの出土は炉の周囲にいくつか見られた。この中で炉体土器A(第8図1)と炉の掘り方の覆土中から出土した土器片(第8図7)がそれぞれ覆土中の土器片と接合した。

炉体土器Aは口縁部に四単位の突起がつくものであるが、そのうち1つを残して口縁部および底部が欠損していた。口縁部の欠損部分はいずれも出土土器との接合により補われた。底部欠損部分の接合はまったくみられなかつたためすでに底部を欠損した状態で持ち込まれた可能性がある。口縁部へ接合した部分の割れ方をみると、突起の部分をまず打ち欠き、次にその間を割っているものと思われる。突起部分の割れ方はいずれもU字形になって、鱗状になっており、割っている順序がわかる(第22図)。土器の注記番号でみると、突起部分の[48]・[46]・[試掘]がまず最初に割られ、次に[炉1]→[炉2]の順で、あるいは[炉5]+[22]が割れている。突起の部分3点はいずれも覆土中から出土しており、土器を埋設した時に割られ、住居外へ持ち出されたものと思われる。突起の[48]は[炉6]とともに割れた輪郭がU字形をなしているところから、割った当初は一体であって、その後に縦方向に割れたと推定できる。割れた[炉6]は炉体土器わきの床面直上からの出土であった。また突起の間の部分は[炉1]が割れ、そして[炉2]が割れるという順序がその割れ方からわかる。この2片も炉体土器わきの床面直上からの出土である。もう一つの間の部分は[炉5]と[22]であるが、縦方向に割れており、それぞれ炉近くと覆土中の出土であることからもともと一つの破片で、炉体土器から離れた後に二つに割れたものと思われる。[炉5]の破片は炉わきの床面直上であるが、[22]は覆土中からの出土で、その後の経緯は異なる。

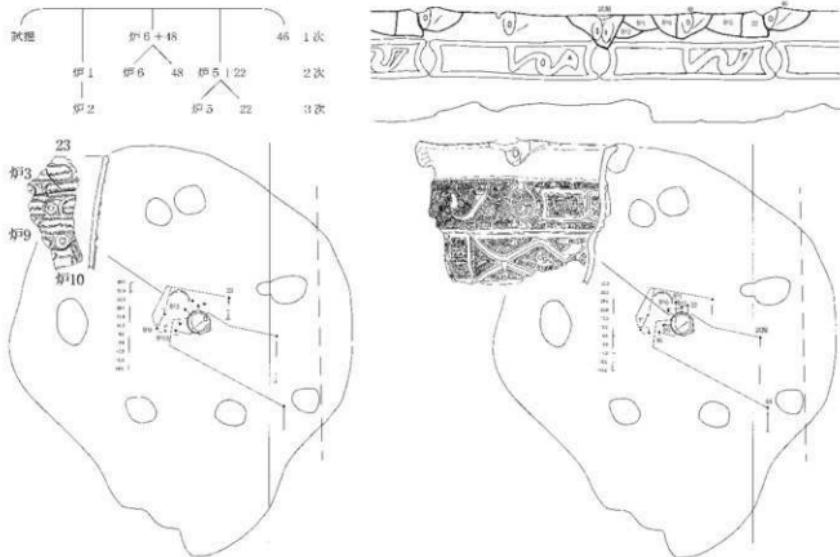
こうして炉体土器は少なくとも三次にわたって割られている。最初に突起の部分[炉6]+[48]・[46]・[試掘]がとられ、次に突起の間の[炉1]と[炉5]+[22]、そして突起の[炉6]+[48]が二つに、最後に[炉2]と[炉5]+[22]が二つに割られている。突起部分は覆土中から出土していることから外部に持ち出されたものと思われる。突起の間の部分は炉のわきから出土しているため炉体土器使用中に割れた可能性もあり、さらに割れたもの一つは覆土中からの出土であるから、これらもまた外部に持ち出されたものと推定できる。

この炉体土器の接合関係から、住居に炉体土器を埋設時に突起部分を壊し、以後漸次壊れながらもその破片は住居近くにあり、廃絶以後住居の埋没過程で混入したものと考えられる。土器片の大きな移動はなかったものと思われる。

炉の掘り方覆土中より出土した破片（第8図7）の注記番号「炉3」「炉9」「炉10」は覆土中の[23]と接合しており、炉体土器埋設時には破片として混入し、その一部が外部にあったものと思われる。この土器は楕円区画内に玉抱き三叉文がなく、また楕円区画が重帶している特徴から猪沢式第3段階の特徴をもつものであるが、三角押文が施されていることからその次期の新道式第1段階に位置付けできるものと思われ、やや古い様相を持っている。新道式第2段階期の住居使用時にはすでに前段階の破片としてあったものであろう。この土器の破片も住居廃絶時に覆土中に混入したと考えられ、炉体土器と同時に同じ扱いであったものと思われる。

覆土中の土器についても接合関係がいくつか見られたが、特徴的な状況はみられない。覆土中の土器の大部分が三角押文と玉抱き三叉文を特徴とするもので、炉体土器と時間的な差がみられず、新道式第2段階に位置付けられるものである。炉体土器や床面直上の土器の接合関係などを勘案して、住居使用時について炉体土器を設置してから廃絶、住居埋没まではそう時間がかからなかったものと判断できる。

炉の埋設土器は二個体みられ、もうひとつの胴部が約1/3抽象文が描かれている土器（第8図2）は、接合関係が無く、全体に被焼による摩耗がみられることから古く設置されたと思われる。住居跡の柱穴の一部にも作り替えが認められるので、そのときの設置による先後関係があるものともいえる。しかし、その土器の文様の特徴は、三角押文に加え波状沈線がみられ、また抽象文も尾部が粘土板でなく降線によって表現されるなど、新道式第2段階よりもやや新しい藤内式第1段階の様相がみてとれる。覆土中の土器においても波状沈線や三角押文を伴わない幅広連続爪形文の施された（第8図10～12）、しいていえば藤内式第1段階の土器がわずかにみられる。よって、新道式第2段階以降に藤内式第1段階の土器の炉埋設があった可能性も否定できないが、それはきわめて短期か一時的であったものと思われる。いずれにしろ2個体の炉体土器の先後関係に問題があると認識している。



第22図 1号住居跡遺物接合図

附編 身延町お宮横遺跡のテフラ

1. はじめに

お宮横遺跡は、富士川左岸の河岸段丘面上に位置する。現富士川流路は、この付近で段丘面を取り巻くように西側に大きく蛇行している。遺跡の位置する段丘面は、河床からの比高約90mで北北西-南南東方向に細長く、同方向の比高10mの崖線によって低位の段丘面と接している。段丘を形成する堆積物は、地表下約1.4m以下に段丘礫層（5層）が存在し、厚さ約0.4mの淡黄褐色砂質ローム層（4層）、厚さ約0.3mの暗黄褐色ローム層（3層）が重なり、さらに黄褐色ロームのブロックを含む厚さ約25cmの黒色-黒褐色土（2層）、最上部に厚さ約40cmの黒色土（耕作土）（1層）が堆積している。遺跡からは縄文中期の住居跡が検出されており、遺構の確認面は2層中に存在する。

ここでは、段丘の形成と層位の確認を目的としてテフラ分析を行ったので、以下に報告する。

2. 試料・分析方法

試料は、調査区東壁の断面から採取したものである。

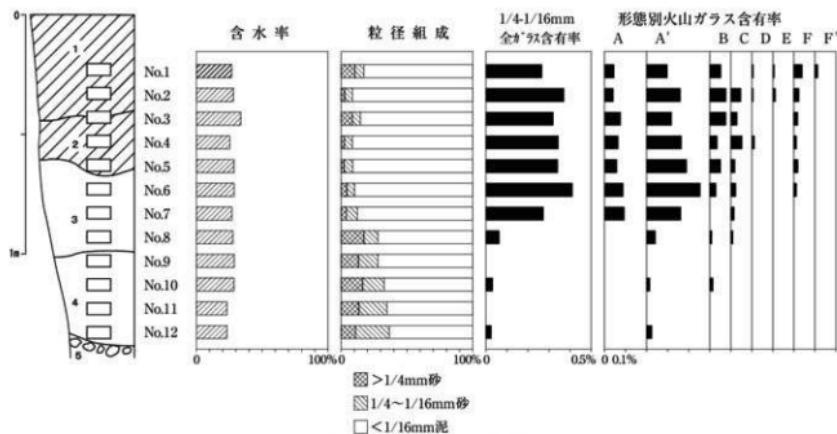
試料は、湿ったまま約20gを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#60, #250）を用いて $>1/4\text{mm}$ および $1/4\text{~}1/16\text{mm}$ の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析試料の乾燥重量は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105°C、5時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、 $1/4\text{~}1/16\text{mm}$ の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が1000粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するF型火山ガラスはF'型として区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、位相差顕微鏡による浸液法（新井、1972）による。

第1表 火山ガラス屈折率測定値

試料	形態ガラス	色調	火山ガラス（主要レンジ）	対比されるテフラ
No.7 泡壁型（A・A'型）		無色	1.499-1.501 (1.4995)	始良Tn テフラ AT

第2表 火山ガラス計測粒数（十は計数以外の検出を示す）

試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
火山ガラス	A 無色	7	7	13	11	8	15	11	+	+		
	A 褐色					1						
	A' 無色	15	26	20	28	29	43	19	4	+	1	+
	A' 褐色	1										
	B 無色	8	13	13	6	8	5		1		1	+
	C 無色		8	5	9	3	4	2	1			
	D 無色	1	1	2								
	E 無色	1	2									
	F 無色	6	4	3	2	3	1					
	F 褐色						1					
	F' 緑褐色	2										
その他	960	938	946	942	948	931	968	994	1000	998	1000	999
合計	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000



第1図 火山ガラス含有率

3. 分析結果

火山ガラスの屈折率測定値を第1表に示す。偏光顕微鏡下での火山ガラスの計数結果を第2表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、1/4~1/16mmの全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第1図に示す。なお1/4~1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4~1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した^(注1)。

試料の含水率は、23~34%と安定し、4層下部でやや減少する傾向が認められる。粒径組成では、礫層直上のNo.12からNo.8において砂分が多く、1/4mm以上の粒子が11~17%の値を示し、1/4~1/16mmの粒子は11~26%を示す。No.7より上方での含砂率は、低率で推移する。段丘礫層形成後においても、富士川の堆積作用の影響がしばらく残り細粒から中粒砂が4層を中心多く堆積したと考えられる。No.12~No.8は段丘化直前の洪水堆積物からなるフラッド・ロームと考えられ、含砂率の変化からNo.8とNo.7との間が段丘面の離水期ととらえられる（山崎、1987）。

検出されたテフラは、姶良TnテフラAT^(注2)である。泡壁型（バブルウォール型）で立体的なA'型がやや多く、平板型のA型を含む無色火山ガラスで特徴づけられる。火山ガラス含有率は全体に最大0.4%と低率で、含有率曲線は、No.6付近に極大が認められ、上方に漸減する。A'型はNo.7で急増し、No.6において極大値0.26%を示し、上方に漸減する。A型火山ガラスはNo.7で0.09%の最大値を示し上方に漸減する。No.7での火山ガラスの屈折率は、主要レンジ1499~1501（モード14995）を示す。これらのことからNos.7~5付近の泡壁型火山ガラスはATに由来するものと同定される。AT降灰層準の推定には二通りの考え方方が可能である。まずひとつには、A・A'型火山ガラスの見かけ上の極大はNo.7からNo.6付近にあることから降灰層準をNo.7~No.6付近に推定することができる。一方、No.8以下の試料は含砂率が高く通常の風成ローム層とは異なることから、ATがNo.12~No.8の堆積期あるいはそれ以前に降灰したが流水の影響下でNo.12~No.8が堆積した時点では堆積物中に河川堆積物が多いために火山ガラスの含有率が見かけ上低く表されている可能性も全く否定できるわけではない。本地点4層の断面では流水を強く示すようなラミナの発達等が観察されないこと、砂分が多くて河川堆積の影響が認められる断面においても南部町天神堂遺跡地点のように火山ガラスの含有が連続的にとらえられることなどから、後者の可能性は低いとかんがえられ、ATの降灰層準がNo.7~No.6付近である可能性が

高いと考えられる（河西，1999）。本段丘面は、AT層準が離水層準とほぼ一致することから、立川面（Tc2）に対比される（山崎，1978；日本第四紀学会，1987）。南部町の旧富沢地区には、富士川右岸に立川面（Tc2）に対比される地形面が分布し、天神堂遺跡・権現堂遺跡などの分布が確認されており、これらの地形面は遺跡立地にとって重要な地形環境となっている。

その他の火山ガラスでは、塊状のB型無色火山ガラスNo.6～No.1に、中間型のC型火山ガラスがNo.8～No.2に連続的に検出される。これらのB・C型火山ガラスの一部は、約13万～16万年前のUG（立川ローム上部ガラス質テフラ）に由来する可能性がある。またNo.5～No.1にわずかに検出される纖維状E型とスポンジ状F型の火山ガラスの一部は、縄文晩期初頭に降灰したKg（カワゴ平軽石）に由来する可能性がある。複数のテフラに由来する火山ガラスが他の堆積物とともに拡散して分布している状況が分かる。

4. おわりに

本遺跡の東断面でのテフラ分析によって、ATが確認され、遺跡の立地する段丘面が立川面（Tc2）に対比されることが明らかになった。

（河西 学）

註1 形態x型の火山ガラスの含有率Axは、 $Ax (\%) = (C / B) \times (Ex / D) \times 100$ で算出される。ただし、B：試料の乾燥重量（g）、C：1/4～1/16mm粒径紗分の重量（g）、D：計数した1/4～1/16mm粒径粒子の総数、Ex：計数したx型火山ガラスの粒数。

註2 ATの噴出年代は、14C年代では約24～25万年前が一般的に用いられているが、曆年較正した年代は2.6～2.9万年前程度と考えられている（町田ほか、2003）。

文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, 254-269。
遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学, 13, 19-30。
河西学（1999）富沢町内遺跡分布調査に伴うテフラ分析。「山梨県南巨摩郡富沢町町内遺跡詳細分布調査報告書」, 23-32。
町田洋・新井房夫（2003）『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺』。東京大学出版会, 336p。
日本第四紀学会（1987）『日本第四紀地図解説』。東京大学出版会。
山崎晴雄（1978）立川断層と第四紀後期の運動。第四紀研究, 16 (4), 231-246。

参考文献

- 石原田北遺跡発掘調査団2001『石原田北遺跡』マート地点』
今福利恵・閔問俊明2004『山梨県における縄文時代中期の時期設定』『縄文集落研究の新地平3（発表要旨）』縄文集落研究グループセツルメント研究会
上野晴朗1967「身延町の遺跡分布」「甲斐路」14 山梨郷土研究会
柳原功一2001「縄文中期の集落変遷と土器様相」「石原田北遺跡』マート地点』石原田北遺跡発掘調査団
小林謙一・中山真治・黒尾和久2004「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」「縄文集落研究の新地平3（発表要旨）』縄文集落研究グループセツルメント研究会
中富町誌編さん委員会1970「平須、石造遺構の調査（予報）」
中富町1971『中富町誌』
西本豊弘・小林謙一2004「縄文時代の年代測定結果について」「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」
平成13年度～15年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）（1）研究成果報告書 研究代表者 今村峯雄
身延町教育委員会1984『南部氏館跡』
身延町教育委員会1992『身延町の文化財 改訂第二集』
身延町元本国寺跡発掘調査団1993『元本国寺跡』
身延町1996『身延町誌 資料編』
山梨県1999「縄文時代の編年」「山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）」
山梨県教育委員会1997『梅平本田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第143集
山梨県峡南地域振興局・南部町教育委員会2004『天神堂遺跡』
湯之奥金山遺跡学術調査会他1992『湯之奥金山遺跡の研究』



お宮横遺跡遠景（東から）

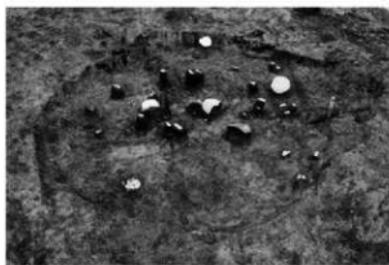


お宮横遺跡近景（南から 正面は身延山）





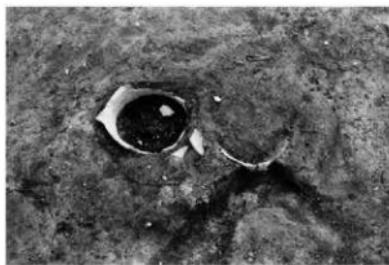
1号住居跡（西から）



1号住居跡 遺物出土状況



1号住居跡 遺物出土状況



1号住居跡 土器埋設炉



1号住居跡 土器埋設炉断面



1号住居跡 炉体土器A



1号住居跡 炉体土器A 展開写真



1号住居跡 出土土器



1号住居跡 出土土器



1号住居跡 炉体土器B



1号住居跡 出土土器



1号住居跡 石匙



1号住居跡 打製石斧



1号住居跡 磨石



2号住居跡（東から）



2号住居跡 土層



2号住居跡 出土土器



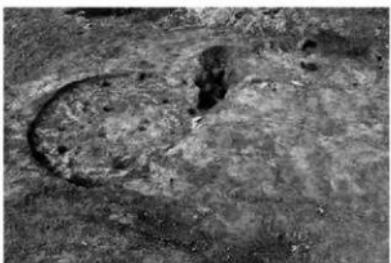
2号住居跡 磨石



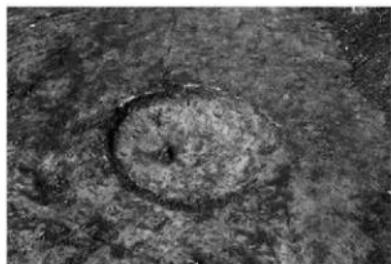
2号住居跡 他出土石鑿



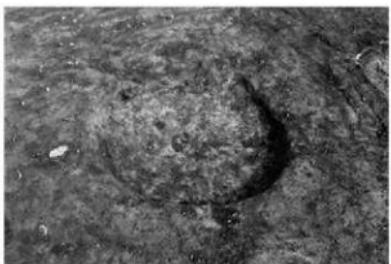
J - 11 土坑 1



J - 11 土坑 2, 3



K - 11 土坑 1



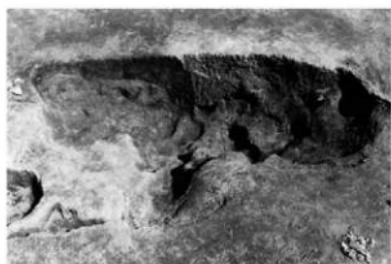
K - 11 土坑 2



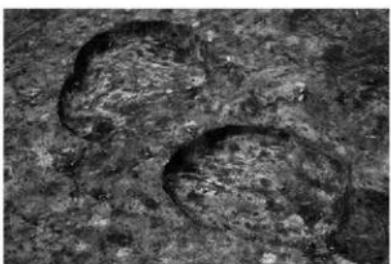
E - 10 土坑



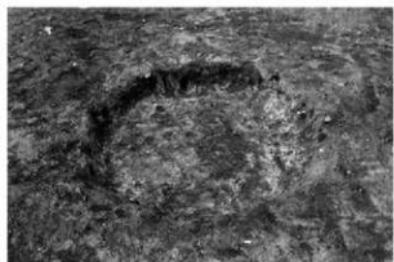
I - 10 集石土坑



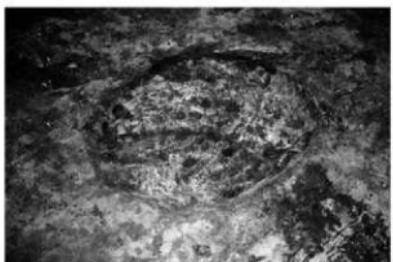
H - 9 土坑



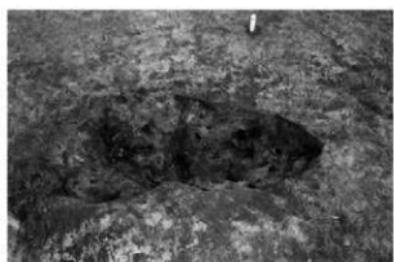
I - 9 土坑 1, 2



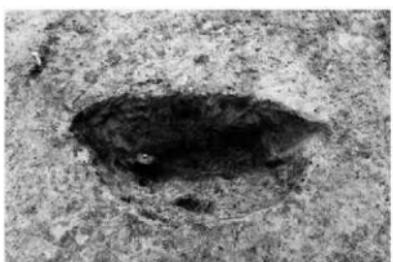
K - 9 土坑



K - 8 土坑



K - 7 土坑



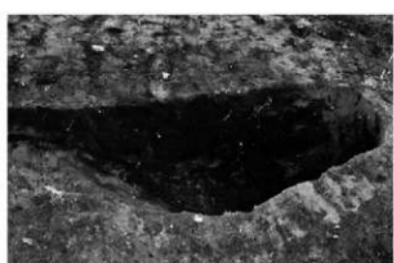
I - 8 土坑



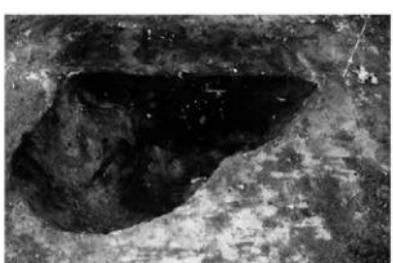
I - 8 土坑 2



G - 4 ・ 5 土坑、G - 5 土坑



G - 4 ・ 5 土坑 土層



G - 5 土坑 土層



H - 5 土坑



H - 5 土坑 土層



H - 4 土坑



H - 4 土坑 土層



I · J - 2 · 3 土坑



土坑出土 土器



土坑出土 打製石斧



作業員

ふりがな	みのぶちょうわだ おみやよこいせき						
書名	身延町和田 お宮横遺跡						
副書名	県営中山間地域総合整備事業（身延地区）和田は場整備に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	今福利恵						
発行者名	身延町教育委員会・山梨県農政部岐南農務事務所						
編集機関	身延町教育委員会						
所在地	〒400-2936 山梨県南巨摩郡身延町常葉1025 TEL0556-36-0011						
発行年月日	2007年3月31日						
所取遺跡名	ふりがな	コード	北緯 (新)	東經 (新)	調査期間	調査面積m ²	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号					
お宮横遺跡	やまなしけんみなみこま ぐんみのぶちょうわだ 山梨県南巨摩郡 身延町和田	19365	34	35.20.50 .01	138.27 2006年（平成18年） 1月28日～3月30日	2500	県営中山間地域総合 整備事業（身延地区） 和田は場整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
お宮横遺跡	集落	縄文時代	前期初頭住居跡 1軒 中期中葉住居跡 1軒 土坑	楕円土器 打製石斧 石匙 石錐			縄文時代中期の住居跡 1軒と土 坑からなり、小規模な遺跡例で ある。

身延町和田 お宮横遺跡

県営中山間地域総合整備事業（身延地区）和田は場整備に伴う発掘調査報告書

印刷日 2007年（平成19年3月23日）
 発行日 2007年（平成19年3月31日）
 編集 身延町教育委員会
 山梨県南巨摩郡身延町常葉1025
 TEL 0556-36-0011
 発行 身延町教育委員会
 山梨県農政部岐南農務事務所
 印刷 (株)三愛印刷